

第 27 号
1973. 5



馬子にも衣装

■ 書評

「死に急ぐ若者たち」 佐藤友之著

- | | | |
|----|-----------------|-------|
| 3 | —— 青年の死生観 —— | 横田 健一 |
| 8 | —— 自殺へのアプローチ —— | 杉野 栄智 |
| 12 | —— 最早是まで —— | 竹内 千代 |

15 「二十歳の原点」

—『不請の念仏両三遍を申して止めぬ』と
合掌したが—

田嶋 麟一

■ 投稿

19 「内なる中原中也」

—《青木中也》の出現—

川野 英明

■ 私の研究ノートから

23 ヘーゲル詣で (VI)

中 埜 肇

26 日中文化関係史の一面 (IX)

増 田 渉

29 差別の空間構造 (III)

—沖繩における住宅難の構造—

末 吉 栄三

2 ■ 羅針盤 — 若者の自殺 —

32 ■ 読者の声

34 ■ 書物の案内

35 ■ 編集後記

題字は網干善教文学部助教授
カット写真は、ゴヤ「銅版画集」より

書評

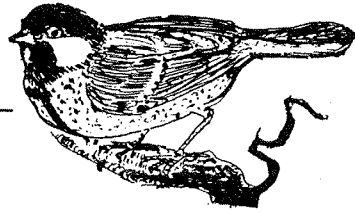
編集・発行
関西大学生協同組合
組 織 部
「書評」編集委員会
大阪工業大学消費生活協同組合
書 籍 部
「書評」編集委員会

連絡先
吹田市千里山東3-10-1
TEL 388-1121
内線 776

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

羅針盤

—若者の自殺—



年季奉公をしている丁稚が、主人から預った金を無くしてしまって途方にくれて自殺する、というような場合は現在ではみられなくなつた。もちろん、前時代的な年季奉公の丁稚が存在しないから当然なことである。が、現代においても、事業に失敗したり、借金が返済できずに責任回避の為に一家心中をするというのは、新聞にもよく載る。金銭面で苦境に立つた人が死に至るのを防ぐのは簡単である。それには金があれば済むのである。

だが、今回取り上げた現代の若者の自殺は性質が変わつてきている。「大学受験には合格したけれど」「私は可愛がられすぎた」といって自ら命を絶っていく。人間とは、強制収容所に收容されて飢えと重労働で生か死の瀬戸際にたたされようと、他人の死を犠牲にして自己の生を保とうとする、生への執着が強いのである。残された自由が、自ら生命を絶つことだけでも、人肉を喰つてまでも生き延びたいのである。だから先のような自殺は周囲から全く不可思議なものに映る。入試の日を目標に、必死に受験勉強をしてきて、その扉をくぐつた後には、過去にあつた緊張感、生の実感が、擬制の大学像に包まれた妥協した毎日には全く得られず、退屈しか見出せないのである。そして彼は、緊迫感をクラブ活動や恋愛に転化することができないで、死への願望とか、自分を極限状況に置いて、死とたわむれようとするのではなく、

生きる目的が欲しくて死んでいったのではないだろうか。このような理由の不可解な死を「死ぬ目的」が見つからないので、死ぬために死んだなどと、もつともらしく片付けてはいけなと思う。彼等は生への執着が人並以上に強かつたために、安易な妥協や、個を否定する世の中に耐えられなかつたのではないか。しかし、純真な心の若者といわれても、やはり彼等は敗北者ではないか。

今回、書評してもらつた「死に急ぐ若者たち」には若者の自殺の一四のケースが収録されているが、編集部としては、古代の若者と現代の若者との死生観の比較・老人と若者の自殺の比較・心理的な分析へのアプローチを試みた。また、具体的な自殺の例として「二十歳の原点」を書評してもらつた。しかし、自殺を統計上の数字で処理するのは、全くのまちがいである。一人の死への過程を反復・検討して彼の求めた生（への実感）を個々分析しなければならぬと思う。編集部はその問題提起として、本書の一四のケースの個を無視して「若者の自殺」と一括して執筆者にも依頼した。今月号を個々の自殺（個々の生）の考察の契機としていただきたい。我々は、今後、行動の結果としての自殺でなく、切実な苦悩は外へ問いただして、生の追求から自殺を眺めていきたいと思う。

死に急ぐ 若者たち

佐藤友之 著

青年の死生観

—古代と現代—

横田健一

敗者の記録は知り難い。

「書評」編集部註文は古代の青年の死生観と本書にあらわれた一四人の現代の青年の死生観を比較してほしい、というのである。古代の青年の死生観を知ることは大変むづかしい。第一に古代の記録は、全国民の中の、ほんの一にぎりの「字が書ける人」すなわち貴族階級の手になるものであり、一般民衆の死生観を知ることは大変困難である。第二に貴族階級の記録にしても、古代の記録は非常に伝説的であつて、真相を知り難い。第三に記録が簡単で、とくに政治史的な記事が多く、死生観のような心の内面に立

ち入つた記事が非常に乏しい。第四に、特に青年が死ぬときの記録は、おおよね血みどろの権力闘争に敗れた人びとのものであるが、敗者の正確な記録は非常に求め難い。なぜならば、歴史的記録は、常に勝者の手によつて編まれるのだから、勝者に都合のよいように書かれる。(註)

敗者の死んでゆく気持を残した史料は非常に少い。それでも、世人の敗れた人びとへの同情、共鳴を伝承の形で残した記録がある。

(註) くわしいことは、拙著「日本の精神」(新書一五五)

倭建命のなげき

倭建命は伝説的な古代英雄である。若年にして西はクマソを平らげ、さらに吉備や出雲建を討ち、さらに命ぜられて東国の悪しき人や荒ぶる神を征服したと伝える。そして最後に伊吹の山神を殺すために、登山して、山神のために大水雨を降らされて疲れ、能登野で死ぬ。「日本書紀」では、西国から帰って、さらに東国遠征を命ぜられたとき、雄たけびして勇ましく出発したことになつてゐるが、「古事記」では伊勢神宮で斎宮として仕えている叔母の倭建命に暇乞ひに行き

「天皇はやく吾死ねとや思はずらむ。西方の悪人どもを撃ちにつかはして、返り参り上ほり来しほど、未だ幾時も経ず、單衆をたまはず、今さらに東方一二道の悪人どもを平けに遣はすらむ。これよりて思ふに、なお吾はやく死ねと思しめすなりけり」とうれえ泣いて出かけたと記している。簡潔を旨とする「古事記」が繰り返し、景行天皇が「吾をはやく死ねと思すらむ」と嘆いた倭建命の言葉を記しているのは印象的である。およそ倭建命の伝説は、正確な記録ではなく、長期にわたる大和朝廷の日本統一過程の伝承を凝縮し、ヤマトタケルすなわち大和の勇者という意味の一人の英雄像に投影したものと考へ



お前さんにはかつげまいて

られている。その英雄が英雄らしくない。はなはだ風采ふうさいとしない、人間的な弱味をみせた人間像に語られているのが興味ぶかい。

古来戦争、とくに長途、長期の遠征軍というものは、非常につらい、苦しいものであり、多くの死者・犠牲者を出すものである。また遠征の軍人・兵士を送り出した家族もつらく悲しいものである。そうした古代人の感情が、倭建命の言葉に反映している。そして倭建命が死ぬ直前に歌ったという

「大和は国のまほろば、豊なづく青垣山山、籠籠れる、大和し美はし」

「生命の全けむ人は、たたみこも、平

群群の山の熊白禰くましろが葉を、響ひび華にさせ、その子」

と歌ったうたは、「遠征の異郷にあつて故郷の大和の美しさを思い、慕い、ほめたえ、そして、今異郷で自分は死のうとしていたが、生命を去うして帰郷し得た人は、故郷の大和の平群の山の熊白禰の葉を頭にさし飾り、長生さして榮し暮らせ」といつていたのである。熊白禰など、櫻、柏などカン類は日本でも西洋でも神聖な樹で、その枝を頭にさすことは、その身を聖別し、長生さすする呪術だった。倭建命のこの伝説と歌には、異郷での苦しい征戦に死ぬことを嘆き、長寿を乞い求め、生命を全うして帰郷する

人を祝福する哀切な情が、古代人の共感を得て語り伝えられたのである。

有間皇子の死

古代の天皇位を争う権力闘争は多くの犠牲者を生んだが、孝徳天皇の皇子、有間皇子もその一人である。その敵手は後の天智天皇、即ち中大兄皇子である。冷徹峻厳な政略家である中大兄皇子は、絶大な権力者蘇我入鹿が、蘇我馬子の女法提殿女の腹に生れた舒明天皇の皇子、中大兄にとっては異母兄の古人皇子を、皇極天皇の後つぎの天皇にしようと思んでいることを察知した。そうなると自分が入鹿に殺されるおそれがある。先手を打ってクーデターを起し、藤原鎌足らと共に入鹿を殺し、大化改新を行った。しかし兄古人がいるので遠慮して、母皇極の弟軽皇子を、孝徳天皇として位につけた。その後もなく、古人皇子が難を避けて吉野山に入って出家したにも拘らず、謀反を企てているという名目で殺してしまった。

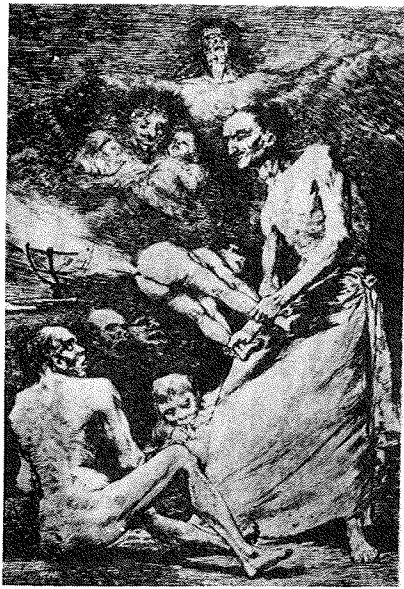
孝徳の崩御後、その皇子有間の存在に遠慮してか、中大兄は皇太子であるのに即位せず、母を再び天皇位につけ、斉明天皇とした。その四年後(六六五)、天皇や中大兄皇太子らが、紀伊の牟婁の湯(今の白浜湯崎温泉)行幸中、蘇我赤兄

に有間皇子は謀反をそのかさされ、皇子がその気になると、赤兄は直ちに皇太子に密告した。有間皇子は捕えられて牟婁に送られ、取り調べをうけた後、海南市の藤白坂で絞殺された。年僅かに一九歳。皇子が牟婁に護送される途中、新羅代の海岸の松の枝をひきまきうんで幸を祈り、うたった歌が『万葉集』に残っている。磐代磐代の浜松が枝を引き結び真幸まきくあらば、赤かへり見む

家にあれば、箭に盛る飯を草枕くさまくらにしあれば、椎の葉に盛る
赤兄にうら切られ、孤立無援のうら若い皇子の心情まことに哀れである。皇子は牟婁へ送られる途中、おそろしく〇中の丸まで殺されることを覚悟していたのであるが、万一の機嫌きげんをたのみ磐代の松を引き結び、幸を祈る呪術を行ったのである。「日本書紀」には有間が赤兄にそのかさされ謀反を企てたと記すが、私は全く中大兄の謀略にかけられたのだと思う。

大津皇子の死

天智天皇の死後、その子大友皇子(弘文天皇)と天智の弟大海人皇子(天武天皇)との間に、皇位継承をめぐる激しい戦が行われた。壬申の乱という。戦に敗れた大友は大津の三井寺附近の長等山で首をくくって自殺した。時に二四歳で



しっかり吹け

あった。「懐風藻」は二五とす、皇子は学問に博く、特に詩にたくみであった。天武には後継者として、多くの有力な皇子があったが、皇后（持統天皇）の生んだ草壁皇子が皇太子にたてられていた。しかし天皇は草壁が病弱であるのに対し、他にすぐれた皇子が多く、競争者の地位に立つのをおそれ、六人の皇子を吉野山に集め、争わぬように誓わせた（六七九）。六皇子中、草壁にとって最もおそろきライヴァルは皇后の姉、大田皇女が天武の妃として生んだ大津皇子であった。

大津は容貌も堂々として、学を好み、博覧で武術にもすぐれ、厚く士を礼したので、多くの人々がつき従い、人気があった。それだけに皇后・草壁には煙たがられた。天武天皇の崩御（六八六年九月）後、二〇日余りして、大津が謀反したと河島皇子が密告した。河島は天智の皇子であり、大津とは非常な親友だったという。大津の謀反は新羅僧行心のすすめであるという。行心は飛騨へ流されているが、罰としては重くないので、私は大津の謀反も持統・草壁が、それにかかわる人々の陰謀ではないかと思う。大津自身が謀反を企てたにしても、そういう気持ちにならざるを得ぬほど追い詰められた状況に置かれていたと思われる。恰も大化改新

直前の中大兄のように。大津は謀反と密告され、捕えられる直前に、伊勢の斎宮である実姉大田皇女のもとに赴いてる。おそろく、追い詰められた危難の迫るのを感じて暇乞いに行つたのであろう。その時、姉はわが背子を大和へ遣るとき夜更けて曉露にわか立ちぬれし
二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越えなむと詠んでいるのは、苦しい弟の立場を思いやり、悲しみ嘆いた切々の情に満ちた歌である。果して、危惧は的中し、大津は捕えられ、詠語田にあった自宅で殺された。年二四歳。妃の山辺皇女は髪をふりみだし、はだして走ってゆき共に死んだ。見るもの皆泣いたという。大津が臨終に際して、養父の池の堤に涙を流して作つた一首（「万葉集」）
百伝を警余の池に鳴く鴨を今日のみ見ても雲隠りなむ
と、また「懐風藻」に残る辭世の詩
金鳥（今鳥）が西に沈も西に沈も
金鳥（今鳥）が西に沈も西に沈も
時刻をつげる大鼓の音は
鼓音催一短命
自らの短命をうながして
是路無一賓主
死の世界には主客の別はない
死の世界には主客の別はない
此夕誰家向
今宵は誰の家に向かう
も共に哀切きまわりない。どんなに死にたくなかつたらう。古代の権力闘争は無情冷酷、血みどろな争いをその後もくりひろげたが、省略しよう。

現代の死にいそぐ若者たち

さて本書に収められた一四篇の若者の手記は四章に分類されている。第一章は序章だがちり別とする。第2章「愛は死を殺した」三篇のうち最初の二、七歳で自殺した岡崎里美は幼くして、余りにもはやく人生の醜い色々な面を経験しすぎたようである。人生はじっくり知識の深まるとともに、腰をすえて味うと滋味くみつくせぬものがあると私は思うのだが、この少女は、両親の離婚、母が分裂症をはじめとして、二三歳で輪姦され、妊娠し、男遍歴をしたという。感受性に富み、文学的才能もある少女が、本当にしみじみとした愛情を味うことなく、人生に疲れはてたと痛ましい。私など、かりに身近かにこういう少女がいたとしても、どう忠告してよいか困るだろう。現代社会は、余りにも青少年の欲望を刺激し、誘惑し汚濁にまみれさせる場所や機会が多すぎ、その反面、こうした誘惑に抵抗する強靱な意志を鍛える場が無すぎます。第2章の二、原爆病で死んだフィアンセを追って自殺した女性の自叙も悲惨である。こんなにまで思いつめず、生き延びれば、あるいは幸になれたかもしれぬが、師の言として「甚重に申せば、あの子はおう心から彼男さんのことを思いつめ、私たちが入り

こゝに余地はなかつたのです(傍原原文)といわれている。結論にもなるが、若者の自殺はひたむきに思いつめ、袋小路に入つて、他を顧ることも、後へ引くことも考えられない境地で行なわれる。

2 童三の中核派の闘士奥浩平の自殺は警官に鼻柱を砕かれたとともに、恋人が革マル派に属していたことにある。鼻柱を砕かれたことは衝撃であることは分るが、私にはなぜ、同じ革共同に属する中核派と革マル派に分れ、一昨年二月四日本学で起つた殺人事件や昨年初の早大の川口君殺人事件のように、殺し合い憎み合わねばならぬのか分らない。なぜセクトが恋よりも大切なのか。革命運動が大切だとしても、なぜ大同団結し、一致共同してやれないのか。余りにも狭い効果のない闘争の仕方にとらわれているように思える。

安保闘争にやぶれて

第3章「失意のはてに」の第一は、六〇年安保闘争に敗北し、失恋して自殺した大学生土上六作である。歌人としてすばらしい才能をもっていた。およそ青年の自殺は、袋小路に入つて思いつめるときに行なわれるが、そうしたひたむきさをワン・クッション置いて反省する時、窮境をのりこえる心境が生れるものである。

そのワン・クッション置くやり方としては、イギリス人のようにユーモアをとすこと、すなわち自分を客観視できること、いわば即自的な態度より対自的な態度へうつることが好い。ユーモアでなくとも、自己の心境を歌や詩によむことは、それへの一歩前進なのだが、この大作の歌は切迫しすぎている。

3 童三の「金子文子は大正時代に有名な爆弾事件の朴烈の夫人であるが、こうした民族差別の残酷さとそれに抵抗する心情には、普通の人間にはたえがたいきびしいものがある。こうしたことが現代にも存在していることを我々は反省させられる。

3 童三、東京オリンピックのマラソン三等賞・円谷幸吉選手が身体の故障のため、メキシコオリンピックに出場して国民の期待に答へ得ぬことを悲しめ、自殺した。過大な期待が青少年を苦しめ、自殺に追いこむことは、親が子供の自殺校受験の際に、よく見られる。子供には親や周囲の期待が重すぎて感ぜられる。子供の真の能力を見極め、本人の自由裁量を大はばに認めることが大切である。それとオリンピックのような遊びごと、ナシヨナリズムが強すぎるのがよくないことはいふまでもない。

3 童三の四「二十歳のエチュード」を書いて天逝した原口統三は、文学にとらわ

れすぎ、文学的挫折を過剰に意識しすぎたようだ。私たちには、それほどの挫折とは思えないが、よき忠告者があればと思う。

抵抗は忍耐強くできぬか

4 童三「反抗と絶望のはさままで」と題されている。その第一、三里塚の国際空港で、土地収容に抵抗して自殺した農民三ノ宮文男の言動は痛切である。私は三里塚と似た先行のケース、下釜ダム建設に抵抗した蜂の巣城主・室原知幸氏に逢つたことがあり、同氏の事件をしらべている。室原氏の抵抗は、現地での闘争のみでなく、徹底的に科学的研究・調査を行い、法廷で法を楯にとつて争つた。私は三里塚の人々が室原氏のケースをモデルにすれば、三ノ宮氏のように自らの命を絶つこともないと思うのだが、これは同情のない言い方だろうか。若い自殺者は、おおむね室原氏のような物凄く忍耐力和粘りに欠けているようだ。

4 童三の二、政府が高校生の政治運動を禁止したのに抗議して焼身自殺をした一七歳の高校生矢島雅彦の死も、余りにも性急に思いつめすぎている。もつと粘り強い抗議の仕方が考えられないものか。

4 童三の三、民族差別と革マル派の横暴に抗議して自殺した早大生山村政明の場

合は、さきの金子文子同様、私たちが長年韓国を植民地にした罪を犯していた日本人人間としては聲も出ない。自責の念にかられる。しかし自殺せず、生きて、差別撤廃運動を忍耐強くやつてはしかなかった。

4 童三の四、三島由紀夫とともに割腹した森田必勝の言行が知られている。森田の行動は純真な、日本の国運を憂うる至情に発したものであるが、私は三島等が自衛隊を合法化するため、自衛隊をクイーターに駆逐させようという考え方ややり方に賛成である。

とかく動機が純真であれば、その行為に対して寛容な人があるが、私はとらぬ。

第5章「自殺」それは限りなき飛翔?」の一は終戦直後、コミュニストとして活動しようとし、家族の反対で果し得ず、一七歳で自殺した少女長次子への言動が示されている。この人の場合も、粘り強くやつてはしなかったと思う。家族が反対したら、一歩後退して、ゆっくり待ち、改めて出直してはしなかったと思う。

5 童三の二は昭和四年の全国的大学紛争の中で、鉄道自殺した二〇歳の立命大生高野悦子の手記からとつたものである。闘争の中で恋を求め、さびしさと無力感とアイロニーによる疲労から自殺したという。死の前に詠んだ死をあらかじめ詩は美しくロマンチックである。若人はこうした死にロマンティズムを感じるの

であろうか。私は生きて行くことには辛さや悩みも多いが、それをつき抜けたところに、もっとロマンチックで美しいものもあるのだと五六年の人生の経験から言いたい。若い人は信じてくれるだろうか。

5章の最終は名作「オリンボスの果実」の作家で、元オリンピック・ボート選手田中英光の自殺である。戦争中兵隊として中国人を惨殺したり、戦後共産党員として活動したのに、それを小説に書いて除名された。左右に激しくゆれ動く生活、そしてついには酒とアドルムと愛人とに溺れデカダン作家といわれた。しかし彼は結局、破壊型作家といわれるように、自分の体験を小説にしてゆくと、種がつき、文学的にゆき詰って自殺したといえよう。

ハエ取り壺のハエを 脱出させるには

本書に載せられた一四のケースはさまざまだが、要するにはほとんど自殺した若者たちは、袋小路の中で行きつまってものがき、苦しみ、力つきて自ら命を絶つたといえよう。私たちは、こんな友人や学生を眼の前にみたととき、どうしてやれるか。

オクスフォードで学び、若くしてなくなったドイツ人哲学者ルードヴィヒ・

ヴァイトゲンシュタインは「哲学の目的とは何か。それは、ハエにハエ取り壺から脱け出る道をさし示すことである。(哲学の探究)」といっている。自殺を真剣に考えるほど思い悩んでいる人は、ハエ取り壺に入ったハエであるが、この場合のハエ取り壺すなわち自殺の袋小路から、どうして脱出させることができるか。

ここで思い出したことがある。昭和四三年春に関東探検部の諸君とフィリピンへ赴いた時のことだ。私は三度マニラ湾の上空を飛び、マニラ湾のあちこちに仕掛けられたエリを多数みた。エリとは海岸線に九〇度の角度に沖の方へ長い網を張り、その先端は、わかり易くいえば、わらかせんまいのように、左右へ長く両手状に網をのばし、その端は丸くまきこんでいる。泳いできた魚群は、網につき当ると、網にそって沖の方へドンドン逃げ、先端の巻きこんだ狭い網の輪に入ると左側へ入った魚群は、いつまでも左廻りに泳ぎまわる。右側の輪へ入ると、いつまでも右廻りに泳ぎまわる。ついに漁師にすくいあげられてしまう。

このエリから魚がのがれる方法はないか。もと来た道へ帰る他はない。すなわち一八〇度回転して、もと来た方向へ網にそって戻ると、大海へ出られるのである。ところが一八〇度の回転という、根

本的な方向転換がなかなかできない。思いつかない。ハエ取り壺のハエも同じことだ。

純真でひたむきの青年たちが、まっしぐらに、目的とするものを追い求めて猪突し、壁につき当たり、挫折した状況は、まさにエリに入った魚である。救いはただ一つ、根本的に発想を変え、一八〇度回転するしかない。

「森に入つて森を見ず」という。エリに入った魚にはエリが見えない。挫折して袋小路に入った若者は、自分の入り込んでいる袋小路が見えない。方向転換して後退することは、若者にとって嫌われる。とくに学生運動をやっている人たちにはそうだ。だが一歩後退、二歩前進が大切だ。

日和見は科学的

「日和見」という言葉がある。学生運動家には嫌われる言葉である。しかし船乗りにとって、特に帆船時代には、大切なことだった。暴風吹きすさぶ荒天の海にのり出し、怒涛を蹴って進むのはカッコいいことかもしれぬ。ちょうど荒天を

ついて大物浦を出帆し、屋島を急襲し、大勝利をおさめた義経のように。荒天にのり出し、生命の危険をおかし、船をいため、疲れはてるよりも、ゆっく

り風のなき、順風の吹くのを待つて、満帆に順風をはらんで航海するのが、結局成功する道だ。「日和見」は最も科学的な方法なのである。それには待つこと、辛抱強く待つことが必要である。純真でひたむきな若人たちは、性急に結果を追い求め、がまん強く待てない。そして疲れて自殺する。一歩後退して、待つた後、二歩前進ができる。

「ローマは一日にして成らず」という。大きな事業は、成しとげるまでに、おそろしく時間と努力と忍耐がいる。一つの小さな学問研究でも一〇年、二〇年かかる。緻密・周到・細心な計画と運営と努力をもってしてである。いわんや革命とか、社会的建設においておや、学問研究でゆき詰まれば、後退し、方向転換してまた違った方法で出直すのである。

大学生諸君には、こうした科学研究の方法を人生に応用してほしい。自殺を避ける道は、これしかない。大学は科学研究を通じて、こうした処世観を身につけることだ。しかし、実践はむづかしい。まして、ゆきつまずき、追いつめられた人に説き聞かせるのは、ツクツクむづかしい。

（評者は文学部教授
よこた・けんいち）

へエール出版・六〇〇円

死に急ぐ
若者たち

自殺へのアプローチ

—かつて昔、そして今—

杉野栄智

(はじめに)

今年の冬にアルバイトしていた時、高校一年の女の子が、私に「男の子も二〇歳過ぎたらおしまいやね」と言ったことがある。私も、もう大人の世界に入ったのかと、淋しく思った。最近の若者の自殺も私にはどうもよくわからない。本書を読んでみたが彼らはどうも旧世代の若者のようである。私には、理解することができた。私はそこで、旧世代の自殺者を中心に、現代の自殺者にも少し触れながら私なりに述べてみたいと思う。

なぜ人間は自殺を思いとどまるのか。「悪霊」のキリーロフによると二つ理由がある。一つは痛いことである。特に思慮をもって人はその要因が大きい。誰もが、痛くはないと承知しながら、誰もが、さぞ痛いだろうとわかる。第二(「こちらの方が大である」)が、△あの世▽である。とキリーロフは述べている。△痛い▽ということ、△あの世▽が、かなりの人間の死を阻止しているのはまちがいないであろう。誰も△痛み▽は恐怖であるし、△あの世▽がどんなところか、あるいは存在するのかわからないか、無機物になると言われても辛く自当もつかない。自殺が衝動的に行なわれているのもそれ

がゆえであろう。自殺のタイプには、経済的貧困や物理的強制による△生▽を肯定しながらもやむを得ず△死▽を招くものと、精神的な破綻をきたし、△生▽を拒否し、△死▽を受け入れるものがある。さらに、自らの△生▽を芸術となさんかゆえに、△生▽を否定し、△死▽を肯定する自殺。この自殺者達には、荘嚴なベロク音楽を思わせるような自剝の旋律がある。キリーロフ、原口統三、三島由起夫などはその典型的な人達である。私は彼らを、その死の持つ重みがゆえに素晴しく思うが、ここでは、紙面の都合もあり、現代の若者の無感動な死とのコントラストでほんの少し触れるだけにす

る。私はここでは、日本の知性と良心を持つほとんどの若者が、同一線上の悲哀をもったたろうと想定される精神的な圧迫によって死を吐いた奥浩平、山村政明、岸上大作、「されどわれらが日々」の佐野について若干述べてみたいと思う。

(恋と革命)への序曲

—かつて昔—

大宰治は日本の生きる墓標「斜陽」において、「人間は恋と革命に生れてきた」と言いきる。これは△恋と革命▽が唯一の生きる源泉であることを意味する。少くとも労働が疎外されている現代においてはエロスの発現は△恋と革命▽以外に

はありえない。八恋と革命が最終的に破壊する時、青年は自己抹殺を志向せざるを得ない。そして私は、奥浩平の「青春の墓標」に、山村政明の「命燃えつきる」とも、岸上大作の詩歌にまぎれもなく八恋と革命を見い出す。奥浩平と中原孝子は、高橋和巳が未完の名作「黄昏の橋」に引用したあの印象的な言葉、「今度の日曜日、デイトしなにか」で恋愛関係に入つてゆく。中原は現役で早稲田へ、奥は一浪で横浜市大。そして二人は、革共同党派闘争へと友人という関係を保ちながら、組織的には敵対していった。そうした関係のうちにも、奥は中原への思慕の念を強め、次のように自問する。「果して自分は、ほんとうに彼女を愛しているのだろうか」そう自問する時、すでに人は、自己の至宝のようにその人を愛している。自己の心という布地に染め出された模様があまりにも自己を専有するがゆえに、反問せざるを得ないのである。二人の春光のような日々は、やがて革共同実力派闘争いわゆる七・二事件を契機に「不幸な現実」として、悲劇化していった。二人の愛が急激な下降線をたどり始めた時、彼は彼女に対して意識的な、全身的な愛の試み始めた。「忘れないでいて欲しいのは中核派と革マル派があつて、僕と君とがあるのではない。君と僕とが識り合つてから、互い

に他党派になり合つたのだ。革命的マルキストたる彼にとつて、愛を告白し苦しむまでに強く彼女を抱きしめたと思つても、党派闘争は二人の間に現として存在した。街角で後姿を発見した時、高鳴る鼓動を押えて足早に振り返つて逢う人である時のやせなさ、その人の感情など、意識から追放したつもりなのに、ほんの少し残つていた信じる力が、ある局面においては、異状な繁殖力をもつて心を制圧するものである。純粹にプラトニックに人を受せるのは青年だけである。そしてそこに青年の歡喜と絶望がある。中原孝子は「友情は、思想を乗り越えられるか? もし乗り越えられないなら、我々の友情は、未来に向つて、無限に保つていきたいものですね。我々は可能な限り、られる方向へ持つていきましよう」という美しい冷静な言葉を所有する。青年にとつて人を受るとは、その人のふとした行為に哀歌を伴ひ、真紅の情熱をもつて行動することを意味する。愛する人の心に、どのような推移が訪れようかと、青年にとつてその人を慕う心は強められ、癒されぬ、愛されるべき少女は常に恥光を守り、青年を貧乏のごとくつき離す。奥もまた、人を受する青年の一人として「僕は君を愛しているんだ」「君も僕を愛して欲しい」と要求とも哀願ともいふ悲しい叫びを発した。

何と単純な言葉だろう。その言葉を発した時のたよりなき。「僕は君が好きだなぞこの言葉を言つてはいけない。単純なるがゆえに真理があることをなぞわかつてもらえぬか。海の深さが不可知なように、愛する人の心がわからない。もう一度、もう一度だけ優しい微笑が欲しい。あでもない口もどが、冷徹な言葉に変わる時、諦めとも言えぬ面持が、ふんわり体を過ぎてゆく。中原の返事は、崩れゆく者を客観視するように冷静に「手紙に書いた二行目とおりです」そして、その言葉によつて二人の具体的な関係にピリオドが打たれる。抽象的な夢幻の愛する人だけが、脳裡を駆けめぐる。二人で静かな緑の世界におおわれた上高地の梓川の小道を、仲良く歩いている。急にその人が走り出す。追いかけて、追いかけて、青空にその人の気弱な微笑が旋回する。追いかけて、追いかけて、ふと眼をさます。夢であることがぼんやりわかつた時のみじめさ。何の通知もなく恋心は沸きあがつて、染液のように、ほんの一滴がやがて心を埋めつくし、脳裡は汚辱の中で押し黙る。奥のノートには、中原への非常に長い、最後の手紙の一日前に次の文章がある。「もつともつと彼女に激しく愛を試みて、激しい拒絶を受けよう。そして、この世界からフツンと関係を断つのだ。不快な朝を迎えないように終わ

りのない眠りにつこう」そしてその長い手紙の二節に、「哀しいことに、人は人生の中にたつた一人の恋人しかもてないのです。そして、私はあなたを好きになり、どれほどがいてもみてもあなたから逃れることができないのを知りました」この手紙の一月月後に彼は、一輪のピンクのカーネーションを握りしめて、プロバリン三〇〇錠を飲みほした。彼にとつて一輪のカーネーションは何を、いや誰を、暗示しているのであろう。

奥浩平は、革命運動に屈することはなかった。革命運動に身を投げ出し、自ら命を断つた八死としての佐野の死。彼は自分が死に臨んで何を思い出すかと自問した時、「俺は裏切者だ」という解答を導き出した。そして、その一言によつて彼のその後の生活は死物と化し、死物からの脱却が自殺となるのである。常に自己のペースを乱さない層根に対して、佐野がたつた一つの優れている所を誇示する言葉は、「傷つくこと、深く考えることもなく、泥沼の中へ頭を突込んで、身も心も傷つき果てることです」と主張する。佐野にとつて革命運動は、雪ダルマのように転がれば転がるほど傷つくことを意味した。

高橋和巳は、「精神の墮落は挫折から始まらない。挫折を正当化しようとする

ことから始める」と述べている。その意味で、佐野は挫折することはなかった。彼は、血のメーデー事件でリーダーとして闘えず、逃げて帰ったことを苦惱する。自ら裏切り者と弾劾する。佐野を運動から、隔離し、自殺へ追いやったのは党派である。六全協が彼を打ちのめし、再起不能にする。佐野と同じく、山にもつた「憂鬱なる党派」の村瀬は裁判所の前で自刎する。高橋和巳の作品には、佐野の亡霊が滲溢している。佐野は、革命を志向し、自己の弱さをあまりにも費残して、汚物を糺みしめるように味わねばならなかった若者の原点をなすものである。純粹な若者はど党派の呪文に傷つき、固く心を閉ざさねばならない。太宰のいう「革命」はマルクス主義革命とは異なる。若者は党派によって、真の革命を見失う。

もう一つの死―山村政明。極度の経済的貧困、美しい人への失恋、党派の卑劣な裏切り、民族の宿命を背負ってあまりに痛々しい死をとげた。山村政明は山口県に在日朝鮮人二世として生れる。私はダメな人間であるが、そんな私でも、山村君の遺稿集「命燃えつきたる」とを讀んだ時は、しだいに目がしらが熱くなりとうとうむせび泣いてしまうことをどうしても押えることができなかったのを覚えている。山村君ほど、へ生きようVと

真摯に思いつめた人間が、かっているだろうか？ 彼の前で死を夢みる若者が「死にたい」ともらしたなら、彼は「死にたい」と言下に言い切るであろう。その人に悲しみがあるなら、その人の悲しみは、その人以外の誰のものでもないという事実には涙ぐむであろう。それほど彼は「人生」を主張する。果しなく生を肯定する。その彼が、なぜ死なねばならなかったのか。私は、彼が少しの暗いところも感じない。彼は絶対的に逆境に屈しようとはしなかった。奥のように激しく愛を試みることすら許されていない現実。美しい人への可憐な恋が民族の宿命という陰画紙に焼きつけられたのである。「美しい少女、君のさびしそうな横顔、憂いのカゲを宿した黒い瞳。静かに澄んだ声。それらにもまして美しい君の純な心」山村君がどんなにその人を愛しく思っただかは、奥が中原妻子を愛したことに少しも劣るものではない。彼は「愛」に生きる以前に、経済的貧困と民族の宿命に苦悩せねばならなかった。彼は、両親が日本に帰化したがゆえに、同胞学生からも連体の手はさし伸べられなかった。「日本人でもない。もはや、朝鮮人でもない祖国喪失者……」。私の安住の地は、一休何処にあるのか？ それでも彼は、自ら朝鮮人であるとする。彼は必要とあれば、いつでもどこでもそのことを明らかにし

た。それゆえ、彼は「悲しい一家にあっては孤独な異端児だ」だったのである。彼は宿命の血を断じて恥じたりはしない。「橋のない川」では幼い恋心は、「えっ、手が冷たいかどうか調べてみた」という屈辱に傷ついた。幼い魂が自らの全身をカミソリで切りきざんで自殺する悲惨な死が描かれていた。しかし常にそこには、誠太郎一家の明るさと優しさがあった。「愛―それだけが欲しい」とと絶叫した山村君に私は涙ぐむ思いがする。彼の経済的貧困は想像を絶するほど悲惨なものである。私のうつろな文章では、とてもそのことを表現することはできない。ただ早稲田は二重にも三重にも彼を苦しめた。まるで貧乏人は大学へなど来るなどいわんばかりに。岸上大作の絶筆の書に「父が戦死して以来、ぼくは少年時代から、社会主義が正しいかどうかではなくて社会主義しかないことを、自分の肌で感じとって来た」という文章はそのまま、山村君にあてはまるであろう。恋愛、生活と破局を生じながらも、なお彼は早大闘争においてノセントクラス連合を組織しようとするに敢然と立ち向う。当然のようにリッピンチで裏切られた。そして生活に決定的破局をむかえ、再び立ち上ることはできなかった。彼は兄に向けた遺書で「敢北したみじめな弟をお許し下さい。闘い抜いて下さい。自殺は悪い、発狂してるのかもありません」と告げている。さらに「死のかなたには、果してやすらかな眠りだけがあるのか。死は人生。生きるの意味もないのか。死はこい。生きるではない、私の知らない喜びがあるのではないだろうか。それは私は、素通りしてきたのではないか。生かされるなら生きたい。死にたくない」と告白している。しかし、明日を生きる糧もなく、信じる友もなく傷ついた彼に何が残されているのであろう。誰が彼を敗北者と呼べるのであろうか。燃えつきた青春Vと評するには、あまりにさびしすぎる。一昨年、早大へ行った時、山村君の死一周年のタテカンがあった。私は、その時ほど党派に腹立たしく思ったことはない。山村君に何もしてやれなかった奴が、どうして今ごろタテカンを立てたんだ？ 山村君を自殺しにしたのは誰なんだ？ 早稲田の穴八幡で焼身自殺した彼に、早稲田はともと関係のない世界だったのかも知れない。舖道にやわらかい陽がさし、北風も吹かず、仔猫が屋根にねむっている。こんな日は、ただ感謝しなくてはならない。

孤高、自ら選んだ、孤高の道でもたまたまなくさびしかった。

誰かのあたたかいひびきで、思いっきり泣きじゃくって見たかった。

私は彼のこのような文章を読む時、その詩情に、空生塵星を思い出す。彼は現代文学の旗手になり得ただろうに。彼は愛した上高地へ死に場所を求めたが、広大な周壁の山脈に悲しい自己の姿を見せたくなかつたのだろう。今、彼の魂は雄大な父、優しい母のもと上高地に強く抱きしめられているだろう。彼の二五年の生涯は、そしてつづられた文章は、優しい青年の魂を痛めた限らない純情の叫びであり、今も上高地にこだまする清澄なうたごえである。

今はただ黙って微笑んでいる彼の姿が目に浮かぶ。

死滅の予感

——そして今——

岸上大作は一万字にのぼる遺書を書き残して自らの命を断つた。六〇年安保闘争の闘士であり、歌人であった彼は次のような歌がある。「反吐しながら、待たれて、へよし子」を花に、埋めゆく愛」彼は歌人らしく、太宰のいう文字通り「愛と革命」に生き、絶命した。愛と革命は永久に成就しない。愛と革命は永久矛盾の弁証法としてある。愛と革命に生きる者には自己の全肯定と全的否定しかあり得ない。こうして、

形而上学的反抗を企てるのである。サルトルの言を借りるなら「人間は自由という刑に処せられている」のである。

かつての若者の死は、青春の過程における一すじの閃光であった。△生△と△死△のどよめき。死する魂は、失なわれた革命と愛さなくてもいい人を愛さなければならぬ現実を収斂しつつただ見つめ至る。青春とは、シジフォスの神話にも似た、激しい徒勞感である。そして今、この青春における△愛と革命△の美学は終止符を打とうとしている。最近の中学生の女の子一人の自殺など、その他理由なき反抗は新たな自殺の到来を告げているようである。かつての自殺とは、感情の出水であり、精神の挫折にあらたが、今はむしろ無感動にある。すでに△死△という事実の持つ重い感動はうすれ日常性の枠組のように行動され、生涯の勇氣を養育することもない。安部公房の

「砂の女」は日常性に抱えられることの恐しさを克明に描いた秀作であったが、現代社会からの日常性の脱却とは果して何を意味するのか。△死△は一回限りの出来事として冒険になりうるかも知れない。だが現代社会の若者の死は無意味なところの意味を持つように感じられる。キリコは主張する、「生は苦痛です、生は恐怖です、だから人間は不幸なんです。いまは苦痛と恐怖ばかりですよ。今、

人間が生を愛するのは苦痛と恐怖を愛するからなんです。そういうふうに作られてもいる。いまは、生が苦痛や恐怖を代償に与えられている。ここに一切の欺瞞のもとがある。いまの人間はまだ人間じゃない。幸福で、誇り高い人間が出てきます。生きていても生きていなくて、どうでもいい人間、それが新しい人間なんです。苦痛と恐怖に打ち勝つものが、みずから神になる。そしてあの神はいなくなる」

現代社会は組織化と計画によって支配されている。システムと時間の中で生活し、すべてがその中にある。マスメディアによって操作され、需要と供給の曲線は計画化されている。いわゆる管理社会である。これは近代合理性が資本合理から支配合理性へと貫徹される中で生じた計画社会である。そしてこの社会を敏感に感じとり、反心したのが現代の自殺であるだろう。

羽仁進の「午前中の時間割」という映画は、そのことを端的に表現している。ある批評が「夢と現実のシステムと時間への挑戦でもある。時計を必要としない世帯が生れつつあるのだ。原口統三は述べる「時間について。僕は決して時計を持たなかつた。大事そうに金時計をぶらさげた似而詩人どもに、僕の旅行のすば

らしい味はわかるまい。僕は時計によって動くのではない」彼は詩人がゆえに、時代を先どりしている。自殺とは対自存在が即目的的存在を否定することである。

人間とは、必然性の中に生きるのではなく、偶然投げ出された社会において、然るに△生△と△死△を判断する神秘性の中に身を置いている。システムと時間を拒否し、神秘の中に生きる新しい世代が芽はえつつある。技術文明は、価値体系を喪失し、今、神秘の世界にかえろうとしている。自殺においても、至体的現実を共有する者が供に△生△と△死△を無意味として扱え、同時に自らの生命を断つ。△意識Ⅲ△とは明るい体制を創造する世代ではなく、△愛と連体△の思想にかわりないとしてもそれは死滅の思想である。△愛と革命△の永久矛盾は果しない虚無の世界へ止揚されようとしている。

(追記)

論旨も一貫せず、非常にまじめな形に終ってしまいました。まじめに読んで下さった方におわびします。さらに奥、山村、岸上の三氏に勝手に判断をし、三氏に非常に申し訳ないと思います。三氏の死に対して淨しい気持ちです。

評者は社会学部四回生
すぎのえいち

死に急ぐ
若者たち

もはや

最早是まで

—青年と老人の自殺—

竹内千代

自殺への背景

清水幾太郎が、「生死の断層」の冒頭に次のような、彼が少年の頃に書いた小説を使っている。

「或る男が深い苦悩に堪えられず、遂に自殺しようと思つて死場所を探しに隅田川の河岸を歩いて行く。暗い夜である。突然、暗闇から飛び出して来た一人の男、矢面に彼の持つてゐる風呂敷包を奪ひ、彼を川の中へ突き落そうとする。彼は思はず、「自殺し」と叫ぶ」

人間は、生物としての資格において、生きようとする意志を持つてゐる。生きようとする欲求は、人間の様々な努力や反省を裏切つて自己を貫く。この意志は、人間が自殺を決心した後においてさえ、その場所や瞬間に人間が身を置くまで、平常通りに働き続けている。

この生の営みを、時利彩は「人間であること」の中で次のように分類している。「生きている」という受動的・植物的な生命の維持から、「生きていく」という能動的・動物的な生命活動を区別し、さらに後者を「たくましく生きていく」本能的行動、「うまく生きていく」適応的行動、「よりよく生きていく」創造的行動という三段階に分ける。

この行動に具体的な目的志向性が添加されたものが、行為である。パーソンズは行為の分析枠として、それが①動機づけのエネルギーを使用し②規範や価値に規制され③状況のなかで④目標達成をめざしている—という四点を指摘した。行為は目標を達成したにしろしないにしろ、何らかのアウトプットを生産し、そのアウトプットがパーソナリティ体系、社会体系、文化体系、手段体系、価値体系に

インプットされ、それらをつくりかえる。先程の動機づけはパーソナリティ体系の、役割は社会体系の、規範は文化体系の、

目標は価値体系の一部である。行為は、徐々に変化しながらも、常に再生産される。（青井和夫「生活構造の理論」）

青年の日の大望も今は空しい。この貧困、その日その日の苦しい生活。一体、人生の意味は何処にあるのか。生きるという張合いが何処にあるのか。しかし、ああ、この子供の寝顔を見よ。如何に貧しくとも、またこの貧困から抜け

出る道がないにしても、一家が仲よく生活しているのに勝る幸福が何処にあるろう。隣りの家を見るがよい。どんなに裕福であろうとも、あのような不な家庭に一日でも堪えられるであろうか。彼はもう周囲を見下して生活することができ。こうした弁明は我々が不断に、一日のろ

ち何回となく繰返しているものである。（清水幾太郎「生死の断層」）

青井和夫は、人間を行為にかり立てる内面的なものとして、欲求と当為という二種類を考えた。前者は「ほしい」と考えるものであり、後者は「しなればならない」と考えるものである。人間は「ほしい」と考えているものと、「しなればならない」と考えているものを表現するために努力するが、「欲求水準」「当為水準」を実現しうることはまれであつて、先程の青年の日の大望も今は空しいという結果におわりがちで、欲求水準や当為水準と実現水準との間には何らかのギャップが生じる。個人的欲求水準を実現水準のギャップが意識面に投影されたのが不満の意識、社会的欲求水準と実現水準とのギャップが恥の意識、他者からの期待水準と実現水準のギャップが孤

独の意識、内面の原理水準と実現水準のギャップが罪の意識である。このギャップがあまりに小さすぎて、欲求がほとんどみだされ、当為がほとんど実行しうる場合には、無意味感を、ギャップがあまりに大きすぎて、とてもわれわれの努力ではそれをうる可能性のないときには無力感を感ずる。これらギャップにより生じた感情に弁明を与えず、固着してしまつた場合、すなわち、弁明次第で外界とのバランスは新しく作り出されるのに、最良は、で、と自己に弁明を許さないと、人は自殺にとりかかるとはなからうか。

青年と老人の自殺率

自殺を対人口発生率でみれば、それは二五・二九歳を小さな山として以後年齢の高まるにつれて次第に急上昇していくが、対死亡原因率でみれば、自殺は三〇歳未満（一六・一八％）に多く以後は次第に漸減して六〇歳以上ではむしろ死因順位的第一（一位）（一％台）にもはいるくらい少なくなる。いわば、前者は自殺という病理現象の対人口の発生数に注目しており、後者は死亡という病理現象に力める自殺のウェイトに注目している。換言すれば、青年の死亡率は少ないがそのなかにしめる自殺の割合は高く、他方老人の死亡率は多いがそのなかにしめる

自殺の割合は低い。あるいは、青年の自殺率はそう多くはないがその死に力めるウェイトは重く、他方、老人の自殺率は多いがその死に力めるウェイトは低い、ともいえる。（「厚生指標」第一九巻）

青年期（三〇歳未満）は一般に、従来
の帰属集団である生育家族や学校から独立分離し、次の帰属集団である結婚家族や上級学校さらに職場へとむかう不安定な谷間の過渡期にある。このように、みずからの中に独立と発達を志向しながら、現実にはそれを受容し支えてくれる基盤のない青年達は、性格上には、その苛立ちとしての神経質と、内面の不充足さをおおいかくす表面的な陽気さが自立つ。そして、多くは、家族にわからず、あるいは家族とさらに問題をおこし、恋愛に破れ、仕事に失敗し、病気を患へ、自殺に追いこまれていく。自殺には予告や未遂が比較的ないものが多いが、孤独のなかで訴える気力も相手もたえず、また情緒的な不安定から発作的に、しかも、だれにもかまわずに死んでいく。本人達はその弱さからか、あるいは、万一の発見と救済の可能性をどこかで最後まで願つてか、自殺手段としては、夜間のガスと薬物を多く選ぶ傾向がある。

老年期（六〇歳以上）の場合では、子どもはすでに多く独立分離しており、また、子どもとの家庭内での地位関係が逆

転している。女性においても、夫との死別が多く、依存と孤独の影が強い。職業生活では、定年を迎え、再就職するにせよ、次第にその社会的地位と役割はなくなつていく。友人状況もこれに應ずるかのようになり、少なく貧しいものになつていく。このような状況にある老年者が、さらに病氣それも長期の疾病にかかると、体力的にも家族的にも社会的にも、もうふたたび生きることの可能性を信じられなくなつて自殺も考えるようになるのである。それは、生きよう場所も、支えてくれる人も生への可能性もみずから失つていく老年者の、残された最後の自由なのかもしれない。しかも、自殺予告と未遂「あり」が自立つのは、この危機への足どりが慢性的なものから次第に決定的なものへと迫つていき、最後に確実な死を求めて縊死と入水が自殺手段に多く選ばれることを示している。

人間は、自己を情緒的に支え、かつ、そこでの地位・役割を十分に確保できる帰属集団を失うとき、生の危機におちいり、しかも、病氣その他により心身ともにその状況に耐えられなくなつたとき、自殺へと導かれるようである。この意味では少なくとも青年期にはより早い結婚家族の形成を、老年期には社会的な喪失と心身の衰退を補いうる家族その他の構成を必要とする。しかし、現実には、こ

れらの多くのものが、ブライヴァシーの美名のもとに放任されている。（「厚生指標」）

孤独からの姥捨志向

北陸の過疎地帯の老人自殺者の背景は深沢七郎の小説「檜山筋考」に似ている。昔、山間の寒村では、妻嫁すれば山へ行く（捨てられる）という習慣があったのだそうです。一人当所得は極度に貧しい状況下にあつて、長期の病氣もつか、あるいはもたなくとも、家族と我が身の行く末を案じて、一見陽気に家族と同居している老人が、ある日突然に、出稼きも憂鬱を氣にし、農繁期に縊死によつて自殺している。

自殺死亡率を市部と郡部で比較した場合、日本全国の年齢階層別自殺者数の市部郡部別比較においては、日本の老年層の自殺率は郡部の方がはるかに高率である。市部では、昭和三〇年頃を転機に伝統的価値体系が衰退しつつあり、個人の自覚と行動の自由の欲求とかが促進されてきたのに反し、郡部ではその刺激が市部よりも弱かつたともみられる。このことはまた老人の間にも老後の独立した生活を志向する自主的態度が芽ばえ、自我の自覚が高まつたこと、また老人に対する保護施策も都市の方が敏感であつた

ことも一つの原因である。と、武永親雄は、「日本における老人の自殺とその特質」の中に書いている。

戦後の日本で最も著しい変貌を上げるに到つたのは農村である。農村における消費水準は急上昇した。そのことを顕著に示しているのは、最近の村落における住居の洋風化である。先程のいまだ貧しく、家族の苦勞をおもつて自らの身をひこうとするのと違つて、こちらは物欲の波がおし寄せられている村で、次のような自殺のケースに、「現代のエスプリ」の六九号の中でいきあたつた。

最近の流行に従つて洋風の家を建て、老母のためには明るい老人部屋が作られ、同じように家族のそれぞれに個室が与えられてカギがかかるようになった。ところがその明るい老人部屋に坐つたお姑さんには思いがけないことが起こつてしまつた。今までは近所のお年寄も気軽に戸を開けて家の中に入つてくるとイロリ端に坐つてゐる家族がまる見えであつた。ところが今度の新しい家では玄関へコンニチワが入つていくと、お嫁さんが取次に出てくる。そしてお母さんの部屋へ招じ入れられるというわけでなんとなく窮屈になり、伊辺閑談の楽しみはなくなりいつとはなしに茶飲み連れの来るのも稀になつてしまつた。それに加えて、今まではイロリ端に坐つていれば孫たちもい

つのままにか寄つてきて時間がすぎるのに、今度の新居では何か特別の用事がなければ孫も顔を出さない。こうして老母はしだいに孤独になり、世の中がつまらなくなつてついに川へ飛びこんで自殺したという長野県伊那地方のケースである。人間関係の変化についてゆけなかつたというところであるが、貧しい村、富める村ともに、かわらざる空白部分をあむせ持つてゐる。

生きがいのある生活

（自殺予防）

自殺理由で、青年期と老年期を比較すると、病気の有無に大差がある。長患いというものが老年期には一番つらいものであるらしい。経済的負担も子どもにかけられ、脳卒中で何年も息子や嫁の世話を受けるとなると、老人は非常につらくなり、みじめでどうしようもなくなくなるのである。ポツクリ寺がはやつたり、各地に中風寺がある由縁がここにある。老人クラブなどで、簡単に死ぬ方法が話題になつたりもするのである。

世界各国の老人の自殺率を國際的に比較すると、日本、ハンガリー、フランスなどは、高齢者になるに従つて自殺率が增大する。この高齢者に自殺率が増加する国々では、個人の我の自覚や自律性が未発達であるといえたとフロイトは述べて

いる。そして、個人主義が徹底している社会では、老齢となつて社会的な孤立状態におかれるようになって、孤独を感ずる度合いとそれに耐えることができる度合いのバランスがとれている。

「月刊エノシスト」四月号のガラスの時代に次のようなことがかかかっている。

窓ガラスの内面は密室である。いわばそれは「透けて見える壁」であり、光のほかになにものものガラスを通してなかに入りこむことはできない。一友、格子、障子、すだれ、のれんなどは空間を分割しながら遮断はしない日本の境界の限定法である。障子やすだれは通ろうと思えば人は自由になんか通ることができ、ガラス窓の場合、視界は完全に解放されていると同時に遮断もまた完全である。障子やすだれのなかでくらす人間と窓ガラスのなかでくらす人間では、考え方や感じ方が違つてくるのは當然である。解放と遮断というこの窓ガラスの機能は、現代文明の一面を象徴している。情報はわれわれの周囲に溢れてゐるが、その情報の伝えれる現実に対してわれわれは働きかけることができない。コミュニケーションは窓ガラスのようなもので、それがふえればふえるほど現実をかえつて手のとどかないものになつていく。郡部における老人の自殺に關すれば、彼ら老人は、日常、農業をめぐる問題、家の

問題、そして自分達の安定の問題にぶつかつてゐる。彼らなりに、一応表面的な解答を用意し、マスキングや観念的世界に身をかわし、ごまかしと逃避の隨氣で日々過してはゐるもの、実は一人一人の心の奥に根強い不安が感じられる。しかし、その不安をつきつめて考えようとする人はいない。自分自身も、他人の心も、あるいは自分たちの住む地域のもつ實際の問題についても、真剣に考えてみようとはしない。自分達の住みなれた土地にありながら、隣人関係の崩壊もなすままにまかせ、自らを眞の孤独に導いてゐる。

人間は、自己の中心的な生活領域が崩壊にひんするとき、その視野の狭小さゆゑに孤独化していく。この生活主体の危機にあつて支えるべき人間や生活基盤を確保することが自殺の予防策である。日本と同じく、自殺で有名なスウェーデンでも、生活の不安がなくなり、社会保障が完備しても、自殺率がかわらないということで、家族形態・住居・労働などについて、いわゆる生きがいのある生活についての新しい試みがなされてゐる。

（評者は大学院生
たけうち・ちよ）

『不請の念仏三遍を申して 止みぬ』と合掌したが

田嶋麟一

〈趣意書〉 へ私は生きるへんだ

- ①全ての生きものが初めての視野であり、その視野の中に「生きる」というより混入されることを拒否することが、私そのものである。
- ②全ての生きものは、私を喰いきむことを望んでいることも、おそろくわかる。
- ③「生きる」ことは、私にとつて何者にも換えがたい生きものであることもおそろくわかる。
- 同時に
- ④しかし、現実のところ、私は殺される。

というものを書くなら、まったくの抽象的である。

「私は死すべきものであり、死は、私にとつて決定的である。それは、いかんとも否定し得るものではないが、現在私が、生きていることも同様に、否、それ以上に否定し得ざる事実である。トーマス・マンは言う。「必要以上に死の考えに没頭することは、生命の権利を侵害することになる」と。いずれは、必ず死によつて断絶されるべき生であるにせよ、結局は、不可解な死を思い煩うよりは、先づもつて生きることを私は考えるべきなのである。」まいか。

私は、『生を燃焼とみる。生が燃焼で

ある以上、それは、完全燃焼であるべく、くすぶつたり、いぶつたりすべきではない。また炎たる焰といえども燃えつきた時、残るところは、灰である」これが全部である。しかし、『燃焼時、その焰を見ることもせず、燃えつくした時の灰（のみ）を思うことは、賢明ではない。むしろ、現実である』思い煩ふこと、想像としての現実を考えあぐねることは、殺生であり、無益である。

「燃焼は完全燃焼をこそ、願うべきなのである」とすると、生きるもの達へ、何を配慮することが許されるのか。

ここにおいて、人間は、自分自身の「死」を自分自身で経験することはない。この「死」を、ジュリアン・ハックスリ

二十歳の原点

高野悦子 著

は「死とは何か」において、次の三つに要約している。

第一は、人間は生涯を通じて絶えず死に一つあるが、かかる部分の死は、全体にとって、往々有用である。

第二は、我々が、人間にとって死と呼んでいるのは、二つの死、即ち、物質の死と、モルフエ (Morphe) の死と組合わされたものである。(Morphe とは、人間を区別できる、他の人間とたやすく区別できる人間たらしめる全てを意味する)

第三は、人間の身体に含まれる物質すべてが、死に絶えるのではなく、死すべきはその人間のモルフエの刻印をもった部分であつて、新しいモルフエを生み出す力をもった生種質の部分は、不死であり得る。

それでは、このジュリアン・ハックスリーの要点に関して、否と解答を尋くならば、どうなるか。

実際はというと、「真理などない」と一人が言った。すとの他のものが、それに答えて言った。「しかし、君自身は真理がないとどうしてか、不遜にも真理だと主張しているじゃないか」とであるだろう。

そこで、私に課せられた内容は、「自

殺」の一面に焦点をあてた新人生持者の「五月病」についての、一つの資料として、高野悦子著「二十歳の原点」の検討である。

日記特有の性格として、芝居、こんなにやぐ、いも、かぼちゃと、ある種同様の扱いを受けているくらいがあることは否定できないが、それは抜きにして、日記という形態で生き続ける(高野悦子への視座を登記すると、大きく二つの観点から捉えることができる)。

まず、その一つに掲げなければならないことは、本来家族であるはずの父親が編集し出版した「二十歳の原点」という日記体文字の関係から自殺者高野悦子を見る方法。

残る一つは、自殺者(高野悦子)の多年にわたつて書き綴られた日記文との関係での自殺者(高野悦子)を見ることの一方向である。

しかしながら、我々読者が、唯一手にし、各人各様の判断を下すことのできるものは、前者である。これが我々の最大限の資料である。出版元「二十歳の原点」が、それである。垣間見た他人の空想として連続し、「なんともまあ」と、卒直な第一印象と同時に、それをも押しつぶされるような真練な(高野悦子)の心情吐露露というより、一方で拒否しつつも、容

認せざるを得ない、己れの共鳴感が先に出てくるのを、抑えることができないのである。——実際は、一つの判断の資料の偏向であり得るのか、または意図したものか、日記体文字の中に我々が認めたのかは、確かめようがないのである。書物の沈黙に抗し得ず、創造的欲求としての興味本位よろしく、ビービング・トムぶることも、読みあさることも、放棄することの中で、出版物による、あるいは新聞紙上等による間接的な経験としての自殺は、直接的な自殺者とは成り得ないのではないか。

Gedanke zu leben

我々は、「生きる」ということに対して、どのような課題と成果を、現在まで、否今後に期待し、懇願するのか。だれに向つて懇願するのか。

生きるということとは、即座に、いかに生きる(べき)かに着手する。人が(生きる)という最初の段階として、「人は享樂的であるべきか」と、そして次に「人は生を静観すべきか」と、次には「人は創造的に生きるべきか」と、順次移行してゆく。

トルストイの「懺悔」の中での言葉を用いると、彼の周囲にある最上の環境(家族・友人・地位・名声・財産)を

享樂していたのではあるけれど、このことに反して、彼は言っている。「生きていられないような気持に到達したのであつた」「私はまるで、あくせくと人生の路を歩いた揚句、深淵に達したのであつた。そして私は、自分の前に、滅亡のほか何者もない事を発見したのである。しかし私は、止まる事もできないならば、うしろに引返すこともできず、また自分の行く手に苦惱と真の意味の死滅のほか、即ち全き絶望のほか何者も無いという事実を見ざらんがために、眼を敵つこともできなかった」と。最良の環境、及び境遇に生きつづけることの煩悩の内を、引き出して、こう結論づけている。

「健康な幸福な人間であるこの私が、もうこれ以上生きていられないような気持になつたのである。不可抗力な一種の力が、私を擲んで、何とかしてこの世の生活から、遁れ出たいと念ずるような気持に、ぐんぐん引きずっていったのである」。この言葉の限りにおいては、このように解釈できるだろう。

死の到来を待つまでもなく、積極的歓迎である自殺と、その自殺の送迎を意識的に働きかけ、獲得しなればならない状況にまで到達しているのであると。

この死の(到来)は、男女の差異なく避け得ることのできない進行形であるはずである。

更には、我々の周囲に、日常不斷に起居する中で生きるための諸条件（単純なまでの、食う、寝る、働くとの三者の観念）の確保をどう（到来）に反映させるかが注目されなければならないのである。簡潔明瞭な三要素は、一つの存在する（生き）ものをどのように環境の中へ混入するかが、次の課題となるはずである。

このことは、東洋的な環境順化と西歐的なマジシーに表現される新天地発見との間の相違を見い出さずにはおれないのである。

（環境）回復の「立つ鳥あとを汚さず」と先の（生きる）ための要件との間に、我々は、いや応なく、極端に言えば、因果関係が存在すること、他に、何者にも変えがたいものとしての（生かす）ために移動する中で人間の性格は、どのように関連しあうことがあるのか。

この小論することに、「方丈記」の鴨長明は、うたかたの世に、無常を感じ、「三罪は、ただ心一つない」と為し、「ひろさわずか方丈、高さは七尺がうち」へと世を捨て、ただひたすら「仏のをしえ給ふむもむき」に徹しようとした。ただ静観することが、唯一生きるこの条件である。これは、一切のものが、川の流れる水のごとく、流れに身をまかせる以外、生きるべき姿を発見することはできないとの論証であるはずだし、また



誰もおれたちを自由してくれないのか

これが全部であることは、表明されるのである。以上は、静観しなければならぬとの陳述である。

アルベルト・シュヴァイツァーによると、前記した静観的（生）をとりえることについて、更に徹底化させているのである。「自己が存在している以上、いかに世界人生を否定しても、「生への意思」は存在している。「生への意思」否定の思想は、その否認し得ぬ「生への意思」を否定して自己矛盾のないものは、自らの生命を絶つ用意のある時のみである」と言い切っている。以上、トルストイ、鴨長明、シュヴァイツァーの全体化として、第一に、生命体の維持破壊ということ

との否定のために、第二に、生命体の破壊として、「自殺（日記）」というものを検討することが重要である。

我々は、「生命」の素朴な維持継続の条件として、先に「喰う、寝る、働く」を掲げておいたが、この条件を支えるものが、生活思想といわれ、労働思想というものである。このことについては、労働問題の解答から導き出された「労働者の意識、存在を我々は各自、自己の領域で、参照しなければならぬこと」を言っているのである。

（高野悦子）の遺した日記文字そのもの

のを、以下に引用する内容から、吟味しよう。
（自殺）ということ、沈黙」という単語に置き換えて、理解の度を深めてもらいたい。そして「言葉」を（日記体文字Ⅱ「二十歳の原思」）に置き換えてもらいたい。

あるいは、仮定として、沈黙を他の行動及び方法にかえ、言葉をその行動する者にかえることも可能である。そして、その逆も成り立つことも、各自証明されることも、確かめるのも読み方であるだろう。

言葉は、沈黙から、沈黙の充溢から生じた。もしもこの充溢が、言葉のなかへと流出することができなかつたとすればそれは自己自身の充溢によって破裂してしまつたことであらう。

沈黙から生じる言葉は、いわば、一つの委任によつて存在している。つまり言葉は、それに先立つところの言葉によつて是認され、正当化されているのである。なるほど、言葉に正当性の証明を与えるものは精神であるが、しかし、言葉に先立つ沈黙は、精神がそこで創造的に働いていることの徴証なのだ。……つまり、精神は産出力を孕んだ沈黙から、言葉をとりだしてくるのである。

今もなお、一人の人間が語り始める場

合には、言葉はふたたび、沈黙から生れ出てくるのである。

まるで、言葉は裏返された沈黙から生じる。実際、言葉はそれ——つまり沈黙の裏面——なのだ。同様に、沈黙は言葉の裏面なのである。

あらゆる言葉のなかには、沈黙がどこから生じたかを示すしとして、沈黙せる何もみえない。そして、またあらゆる沈黙のなかには、なにか語りかけてくるものがあるが、それは、沈黙から言葉から生じることの証拠に他ならない。

更に、生命の根源、もしくは、生命体を維持する要件とは何か、と二十歳の原点、全体についてみると、

沈黙は、言葉なくして存在し得る。しかし、沈黙なくして言葉は存在し得ない。もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまう。にもかかわらず、沈黙は決して言葉以上のものではない。反対に、それだけのものとしての沈黙、つまり、言葉なき沈黙の世界は、いわば創造以前のもの、完成されていない創造、いや脅迫的な創造だとさえ言える。

ほかならぬ言葉が、沈黙から発生することによって初めて、沈黙は創造以前から創造へと、無歴史性から人の歴史へと——つまり、人間の身近へと——歩みよ

るのである。

かくて、沈黙は人間の一部、そして、言葉の正当な一部となるのだ。しかし、何よりもまず第一に、ただ言葉のなかでのみ、真理は明確な形をとるからこそ、だからこそ、言葉は沈黙以上のものなのである。だから人間は、言葉によって初めて人間となったのである。

「ギリシヤ人が、人間の本性を生きたロゴスを持つるものと定義したのは、果して偶然であるのか (animal ratio)」、「理性ある動物」、「理性ある生命体」という意味でこの定義の後代の解釈は、間違っているのではないが、それは、この定義が導き出された現象学的基礎をぬいてくれている。実に、人間は、ものを言う存在として、現われ出るのだ」(ハイデガー)

言葉がそこから生ずることによって初めて、沈黙はおのが完成を獲得する。つまり、沈黙は言葉によって初めて、意義と尊敬とを賜与されるのである。沈黙は言葉によって、野性的な、人間以前のものから、温順な、人間的なものになるのである。

() は、() 以上のものである。それも、() のなかには、真理が姿をあらわすからに他ならない。() のなかにもたしかに、真理は存在す

る。しかし、そこに真理があるということは、() の場合とは異なり、() にとつて、特徴的なことではない。

() の中に真理があるといても、それは、() が、存在一般の秩序のなかに宿されている真理に、関与している限りにおいてのみのことであるにすぎない。つまり、() の沈黙のなかでは、真理は消極的である。真理は、() のなかでは、眠っているのだ。ところが () のなかでは、真理と虚偽について種極的な判断がなされるのである。

以上、「自殺」、「日記体文字」日記、更に、その一般化の方向として、あいまいなまに、《沈黙》《言葉》へと関連をしてきたが、最後のセンテンス、() のなかにも、我々はいかなる言葉——言葉というよりも、実際の行動——をほめなければならぬのかが、問われなければならない。

以上のことから、我々は、日々の活動(喰う、寝る、働く)というなかにおいてどのようなことが、一つの行動様式として、真理として、かつまた、当然引き起こされる癖として、自己のなかに位置づけるのかを、真剣に問う時期に到来しており、我々は、先に掲げた、人間の三態の生き方を、いま新ためて問うことが(一番大切なもの)であるのか、よくみなければならぬのである。

最後に掲げるセンテンスは、「沈黙と、言葉との中間にある人間」

人間が口を開く直前には、言葉はまだ、それがちょうど今そこら立ち去ったところの沈黙のうえに漂っていた。

言葉は、沈黙と言葉との中間に漂っているのである。言葉はまた、どこへ向うべきか——ふたたび沈黙へかえり、沈黙のなかで消え行へべきか、或いは、それが、普声となること——によってきつぱりと沈黙のもとをたら去るべきか——に、迷っている。

そして、言葉がどちらへ向うべきかを決定するのが、他ならぬ人間の自由なのである。(未完)

〔参考文献〕

「ゲーテにおける生と死と不死性の関係」

中村恒雄著 五〇〇円

『沈黙の世界』

マックス・ピカート著

佐野利勝訳

みすず書房 六〇〇円

評者は四十七年度法学部卒業生
たじま・りんいち

〈新潮社・四五〇円〉

《青木中也》 の出現



川野英明

槍で牛を突くエル・シッド・カンペアドール

「内なる中原中也」 青木健著

はじめに

誰もほんとうの中也を暴きたてることなどできないのだ、という確信に似た感情が二〇歳の頃、あった。大岡昇平や北川透や大岡信がいくら呼びかけても、僕の内面に頑に巢喰っていた、極めて主情的な拒絶だった。

「お前らのは中也ではない」と、内なる声が叫び出していた。

いったいに、中也の詩は口ずさんでいなければ浸透してこない質のものだし、そうした対話の内に、論理を介することなしに到達できる（絶対空間）がある、と考えていたから、中也論なるものは不要であった。あるいは、単なる障壁物のようなもので、「お前らが邪魔をするから、ほんとうの中也が見えにくくなる」といった風だった。思いあがっていたのである。

しかし、そうした思いは、あながら全く否定し得ないもので、僕のほか

にも、「中也の詩は判る者には判るが、判らん者には今輪際判らんもんや」と、得々として語っていた先輩がいたのを記憶している。はなはだ超論理的で、それにもかかわらず説得力があった。

思うに、僕らが青年期に中也との関りをもったことが、先のような言辭を弄せしめた主因ではなからうか。ニヒリズムの克服という荷やつかいな命題を背負い込んだ者とか詩作に没入した者だとか、いわば「求心的」な運動を内包していた精神が（純粹持続）の精神の生身の告白に呼応したといってもいい。

ところで僕は、またそう中也の極、あるいは聖域を暴き出した男に出くわしてしまった。——青木健氏である。

しかも、彼の場合は、いままでに公にされた《中也論》とは、全く趣を異にしていた。僕は、彼の「内なる中原中也」によって、初めて「ほんとうの中也」を見た、という飾しい幻想をもった。

なぜ僕が本書に耽溺したか、徐々に披歴しながら、「青木中也」の全貌を紹介していることと思ふ。

「青春」の確執

まず、青木健氏の略歴を紹介しておこ

う。氏は昭和一九年、京城生れ。御父君が

彼地で高専の教授をされていた。名古屋
大学法学部卒。本書「内なる中原中也」
が処女評論で、ほかに小説、詩と、多岐
にわたる文筆活動は、すべて四日市で発
行されている文芸同人誌「海」（間瀬昇
氏主宰）に発表されている。

氏が中也に取り組み始めたのは「〇歳
で、本書が刊行されたのが昨夏だから、
約七年を経ている。

この労作は「海」に、当初「〇枚程
のエッセイ」として発表されたものが核
となっているが、それは本書の冒頭の、
〈ブレリユード〉の章にあたる。

氏は中也に出会うよりも前に〈太宰体
験〉を持って、太宰を書き続ける過程
で中也に出くわしている。中也が太宰に
投げかけた問いかけが、青木氏の青春を
名実ともに呪縛してしまつた。

中也が太宰に投げかけた問いとは「お
めえは何の花が好きだい？」というもの
である。そして、周知のように、太宰は
「ももの花と答へ、中也に「ちえつ、だ
からお前は」と吐きすてるように言い
放たれてしまふ。

この中也の言葉の呪縛は、青木氏に関
しては〈ブレリユード〉に、くつきりと
縛目を残している。

「……それ以来、太宰論を書いている
間も、書いてしまつてからも、中原中也
は「ええ？ 何だのおめえの好きな花は

……」と、酒臭を含んだ息を吹きかけ、
ぼくは絡めつた。ぼくが彼を睨みつ
けていなければ、中也の拳が少し形の悪
い大きなぼくの鼻めがけて、疾風よう
に飛んできさうだつた……」

そこにはすでに、青木氏が宿命的に中
也にかかずらわさるを得なかつた、根深
いいわれが記されている。

言つてみれば、中也はいはゞ鏡」とし
て登場してき、〈青木中也〉は、青木健
という「青春」と、中也との闘争を著わ
したものだとも言える。そこに、いわば
「青春の確執が明証されていると言つて
もいさう。

実に、その一点こそ青木氏の〈中也
論〉の動機が現出しているわけで、僕が
感動的戦慄を覚えたのもここだ。

また、本書には青木氏の想像力の豊潤
さ、鋭さがいたるところに象徴されてい
て、そのキラメキは氏の「内なる中也」
のイマージュを鮮烈に写し出す。そのう
え氏は実証的な踏査を裏付けとして持っ
ておられる。一層、読む者を魅了せず
にはおかない。

僕は過日、出版された青木氏と、一夜
語り明かしたことがあるが、その折、多
少酔つていたこともあつて、「兄は、こ
のエッセイを書き続ける過程で、小説
・中原中也」といつたものへの傾斜を、

心中秘かに持ったはずだ」と、尋ねた。

青木氏は、僕の放言を寛容に受けとめ
てくれ、確かに「小説・中也」を書き
たい衝動に駆られたことは否めないし、
（本書にも）中也の画像を何枚か描いた
ように思う」と答えた。

そして、中也を描こうとすることが、
青木氏にとって、自身の「青春」を写し
出すための、苦渋に充ちた作業であつた
というところが、徐々にひき出されてくる。
「中也詩のうたわれた場所」の章に
異端者・中也の「青春」の行動様式は次
のように述べられる。

「……『汚れつちまつた悲しみに……』
において、中也はみごとに彼の悲しみを
浄化してみせた。中也は『汚れつちまつ
た』という舌たらずな表現によつて、か
えて自己の「悲しみ」の汚濁をすみや
かに洗いおとす。……中也は生前その友
人達にとことく辛辣な悪戯や、いやが
らせをした。その結果、皆彼から離れて
ゆくのだが、彼にとつて目的は友人を傷
つけることではなかつた。告白せねばな
らないほど倫理性の強い人間にとつて、
アイロニクな表現とは、いわば両刃の
カミソリなのだ。……中原中也は自己
の「純潔」を守るために、その「純潔」
を故意に汚さなければすまなかつた不幸
な男の一人だつた。この男はそれを詩の
フォームにまで昇華させた。ところで、

この種の自虐性とは青春特有のもので
あるのだ」

それは、「全部意識したとしてなお不
純でなく生きる理論（中也を求めざる
為であつた。

また、青木氏は同じ章で、中也詩の告
白性を次のように語っている。

「中也の詩は、すべて彼の魂と生活
体験の告白である。……ぼくの中也の詩
に対する〈答へ〉のほとんどが、このテ
ーゼから出発していると言つてよい」
「もし、ぼくたちが中也の〈告白〉の
〔聞き手〕にならうとすれば……「ゆあ
ーん ゆよーん」という倦怠と怨念を含
んだ不協和音を主調な基音とする音楽の
演奏されている所」へ行かねばならず、
「もう〈告白者〉と〔聞き手〕との隔壁
はなくなる。……そこには〈告白者〉が
二人いる。中原とぼくと……。そして、
うかつにもこちらが告白の歌を歌いはじ
める……」

中也は歌を聴かない。「聴いているよ
うなふりだけはする」（「詩人は辛い」
第二連）

考えてみれば、青木氏は、自身が〈後
記〉で言つているように、「……鼻つきあ
わせていたのは中原中也ではなく、己自
身の貌」であつたのかも知れない。「鏡
としての中也を見ていた……」と、
中也を回転するコマになぞらえて、氏

は《自意識の内旋回》と表現しているのだが、氏自身もやはり一つのシズゴマであったと言える。

そして、そうなることによつてしか、おそらく『内なる中也』は描き得ないものであつたらうと、僕は確信している。

ここで、僕は、本書をまだ読まれない人のために『内なる中原中也』のコンテンツを紹介しておこうと思う。

I、ブレリユード II、中也詩の宗教性 III、中也詩のうたわれた(場所) IV、青春—富永太郎の失意—V、故郷喪失者のうた VI、『青銅時代』 VII、検証する怨念 VIII、怠惰の掟 中也詩における時間性 IX、時代を孕んだ悲歌 X、《白》と《死兎》の映像について—ゲオルク・トラウクルと中原中也 XI、恥の存在論—ジュール・ラフォルクと中原中也

オトオトウー

恥の存在論

コンテンツをきつと見れば、本書の全貌もおよそ把握できるものと思ふが、まず特質として掲げておきたいことは、この《青木中也》が、中也の青春の「場」を、実証的な踏査にもとづいて、克明に描き出しているという点である。

この特質は、青木氏のイマジネーションの強靱さによつて肉付けされ、例えば

《検証する怨念》の章における、中也、小林 樺子の三角関係に見られるように、極めて強い創作的な色彩を放つていふうちに、中也詩が不安とは別種の「恥」の核を持つていくことに、彼の詩句を貫いている思想が《不安の存在論》ではなく、いわば《恥の存在論》であることに思い至つたのである。そして、この中也の存在論も、もつとも明確なかたちで表出しているものが、『在りし日の歌』の「意識」である。

さらにもう一つ、本書の中心となる論理展開を掲げねばならない。この論の核は、すでに述べたように、『ブレリユード』であり、そこを出発点として、青木氏の思索は螺旋状を描いて終章の《恥の存在論》に到り、結論をみるという形である。

青木氏は《恥の存在論》を、中也の幼年時から説き始める。

「中也にとつて幼年時は《回帰》不能の時、もつとも《特権的な時間》として規定される。《幼年時》は彼の内部で極端に聖化され、それ故に彼の追憶の詩を歪ませるのである。何故なら極端であるということは、最初に歪むということ意味するからである。」

「ぼくは、長い間中也の詩の底に息づいている名状しがたい苦おしい痛痒感に似た感覚、あの破格語法の、へし折れた破調の暗渠をなしているものを、一種不可思議な存在自体の不安と、生そのものへの怨念だと考えていた。そうして、その一方でその考えを少し違つていとも思いつづけていた。不安と怨念、そう言い切つてしまうと、中也詩は指の間から

砂粒のようにキラメキながらこぼれ落ちてゆくよきだつた。しかし、彼の詩句のいくつかを、幾度もなく繰返し語つていくうちに、中也詩が不安とは別種の「恥」の核を持つていくことに、彼の詩句を貫いている思想が《不安の存在論》ではなく、いわば《恥の存在論》であることに思い至つたのである。そして、この中也の存在論も、もつとも明確なかたちで表出しているものが、『在りし日の歌』の「意識」である。」

そして、存在論は次のように分析され、《恥の存在論》となる。

「生き残るものは凶々し。」(筆者注)『死別の翌日』の「行目」という中也の存在論というものが、その構造の内部に何故「恥」の核を持つているかといへば、それは、彼にとつて《幼年時》、《少年時》こそ在りうべき存在の時間であり、存在として全き、汚濁なき姿であつたからで、以降の生は、墮落し、汚濁され、枯涸してゆく、下降する生でしかないという、彼の先験的ともいえる観念にその根柢を持つていた。だから、成年した彼は、現実の生を、恥の感覚なくして容認することができない。彼にとつては《死兎》だけが無垢なのである。」

青木氏の中也発掘の作業は犀利を自己への切開作業をも意味して、『死兎』だけが無垢—だと言いつける時、氏自身の深

層に、沈潜した自虐の傷が、再び刻み込まれたということも思つてみないわけにはいかないだろう。

もう付け加へべき言葉は何もない。新しい《中也論》は、青春を賭した一人の作家によつて、ここに現われた。

思えば、『他者』への確執そのものによつて自らを獲得する「青春」が、ほかならぬ《他者》について語る時、わかれが、往々にして、《鏡》に向つて語りかけている彼を自撃するのは、しごく当然のことだつたのかも知れない。

青木健は、中也を語りながら、実は自身の思想の根柢をこそ《恥の存在論》として掘えたのだといえる。

青木健の「唄」

僕はいま、ふと二、四年前、青木氏と新宿の街を徘徊した一夜のことを思い出した。あれはたしか夏だったが、夜と朝の間、大気が閃白く漂揺しているような時刻に—人は、『山手ホテル』、『国鉄山手線』めぐらして歌舞伎町から駅へ向つて歩いていった。と、唐突に彼は、あの『材木』という中也の詩をよく速声で歌いだしたのである。

立っているのは、材木でオシジャ、野中の、野中の、製材所の脇。

立つているのは、空の下によ、
立っているのは、材木ですじやろ、

日中、陽をうけ、ぬくもりませすれば、
樹影の匂ひも、致そうといふもの。

僕は、氏が美声の持主であることはす
でに熟知(?)してしたが、この「唄」が彼
の昏にのつて、これこそ中也の自虐のう
ただ、と僕はただ、彼の肉声のわが耳に
浸み入るのを黙って聴いていた。しかも
なんともいえない心地よい冷気に晒され
ていたので、子守歌のように鼓膜にこび
りついて離れなかつた。

いま振り返ってみれば、あの頃青木氏
はこの「材木」という唄ばかりでなく、
中也の詩のほとんど全部を誦じて得てい
たかも知れない。ちょうど、「検証する怨
念」の章を書いている頃であつたと記憶
している。

青木氏は全く逆に、北川透氏は、そ
の著書「中原中也の世界」のあとがきに
「今ぼくは中原中也の一篇の詩も暗誦で
きない」と書き記している。

この両者の相違は看過することを許さ
ない重要な意味を持つものである。それ
は僕がこの稿の冒頭で述べたように、「中
也詩は口ずさむことによつてしか理解し
得ない性質のものだ」という、中也詩の
理解にかかわってくるものだから、言

つてみれば「暗誦」の頻度が、どれだけ
中也を純粋にとらえようとしているかの
「尺度」たりうるといふことだ。

従つて、僕の見方は北川氏に不利(?)
なものにならざるを得ない。また、青木
氏に上つては、氏が青春を中也との抗争
のうちに過したことが、「純一さ」を失
わない独自の「中也論」の構築にさいわ
ひしたといえるだろう。

評論の新しい方向

この稿の最後に、僕は青木氏が新しく
切り拓いた「詩論」の方向について考え
てみようと思ふ。

氏は「中也詩の宗教性」の章の冒頭で
「詩を分析する」という作業に果してど
だけの価値があるかと問われれば、ぼく
は沈黙するより他に術を知らない」と言
っているのだが、この言葉は本書を読み
了えた時、非常に含蓄のある言葉として
蘇生してくるのである。

つまり、評論家としての青木氏は単
なる文獻主義一本ヤリの評論を、やや否
定的に評価していると思えるのだ。

文獻学者の「詩の分析」は、およそわ
れわれに、創造にかかわりある知的刺激
を与えたりはしないものだし、それが評
論の新しい方向に何らかの寄与をする
ということとは考えられはしない。

「青木中也」は、詩論の新しい試みと
して高い評価を受けている。

昨年九月、朝日新聞の「文芸時評」で
吉田健一氏は「ここに日本の現代詩人を
扱う上での一つの解決があることに気付
いた」といい、「詩を得るためになされ
た作業を詩人の生活から推定し、再建
して見せることで一編の詩論を書くとい
うのは青木氏以外にそう多くのものがし
ていないこと」だと讚美している。

また、同年一月の「週刊読書人」の
書評欄で鈴木和成氏は「……批評の常識
をわずかに逸脱した一点で、いわゆる文
学研究をこえる独自性を獲得しえた」と
賞讃している。

「青木中也」が、評論の分野での新し
い試みであり、しかも成功しているとい
うことは、もはや改めて言うまでもない
が、僕はそれを、吉田健一氏のように、
詩人の生活を再構成した、という一点
においてのみ評価することはしないでお
こう。

僕はむしろ「青木中也」の「試み」と
しての新しさは、青木健という一人の青
年の、冷厳なまでに己れの「自意識」の
うとまじさ、がまんならなさ、苦々しさ
……を検証しつづけた精神の軌跡にこそ
見出すことができるのだと確信する。
また、中也は青木氏にとつて最もふさ
わしい「相手」であつたわけだ。

僕は、評論を書くとする場合に、自
身の存在の某幹部に抵触してゆく対象を
選択することの妥当性を、本書「内なる
中原中也」によつて再認識させられた。
そして、そのした対象との抗争をいか
に闘うかが自身の「存在論」を抽出する
ことになつてしまふわけで、そこにこそ
評論の新しい方向性も導き出されてよ
うというものではないか。「青木中也」
はそういう意味での成功例だと断言でき
る。

最後に、僕は、これから中也との対話
を始めようと思はれる方々に、本書が測深
鉛の役割を持つるものであることを記
して、この稿の結語としたいと思います。

評者は四三年度法学部卒業生
かわの・ひであき

で詣るゲルへ

VI 肇 中 塾

わたしの 研究ノートから

ニュルンベルク(つづき)

ヘーゲルは一八〇八年から一六年までの八年間をニュルンベルクのギムナジウムの校長として過ごした。そして一八一年にはこの市の古い都市貴族の家柄であるトゥーバー家の令嬢マリーと結婚した。その時ヘーゲルは四十一で、男としても結婚適齢はとうに過ぎており、マリーは彼より二〇年も年下で、やっと一〇才になったばかりであった。ヘーゲルがこういう名門出身のうら若い、美しい(今も残っているマリーの晩年の画像から想像して)令嬢との結婚をどれほど喜んだかということは、当時の書簡からも

鮮やかに読みとれる。

またヘーゲルはこの八年間に自分でもギムナジウムの講壇に立つて哲学を講義した。これが彼をニュルンベルクへ呼んだニートハンマーの樹てたバイエルンの教育方針でもあつたからである。そしてこの講義が、彼の死後に編集されて「フイローフイッシュェ・プロバドイティク」(程渡文庫では「哲学入門」となっている)として全集に入られた。これはギムナジウム(高等学校)の生徒を対象にしたものであるとはいへ、かなり難しいものであるうえに、前に述べたように、この後ハイデルベルク以後に作られる彼の哲学体系のあらましを予測させるものであり、少し専門的にいうと、後に述べるイエーナ時代(私の巡礼の順序から言えば後に)なるが、ヘーゲル自身の生涯から言えば

フランクフルトの次で、彼が初めて大学の教師になった時代、に彼が努力して形成し始めた体系と、ハイデルベルク以降のいわゆる「エンチクロペデー」の体系とを架橋する重要な役割を果すものである。しかしニュルンベルク時代の労作としてこの講義よりも遠かに重要な意味を持つものは、一八二二年から一六年にかけて彼が書いた第一の名著「論理学」(いわゆる大論理学)である。二巻三冊から成るこの書物の中で彼はいわゆる「ヘー

ゲル弁証法」を壮大なかたちで展開したわけであるが、これは彼自身が「天地創造以前の神の似姿」と呼んでいるように単にその表題から連想される狭い意味での論理学ではなく、むしろ宇宙論的なスケールを持った形而上学構築である。

しかし私たちが読むものは、単にこの書物の壮大な構想とそれを貫いているヘーゲルのすさまじいまでの思索的エネルギーだけでない。もちろんそれらは確かに私たちのレベルを抜いており、どうして私たちが模範とすることもできないものである。けれどももつと身近な事柄で、私たちが心からヘーゲルの前に脱帽せざるを得ないことがある。それは彼がギムナジウムの校長として教育管理上の職務を執り、しかも自ら哲学入門の講義をするという、それだけでも多忙な生活のなかで、この膨大で洗練な書物をものにしたという事実である。人間はやる気さえあれば、どんな境遇にいても良い仕事はできるものだということの手本がこのヘーゲルの大論理学だと言つてよい。もちろんリルケのように生涯かかって僅かに一行の詩句ができればよいという考え方もある。しかし日本の学者の間でしばしばそうであるように、それが自らの怠慢の口実であるならば、むしろ私たちはヘーゲルに学ぶべきであらうと私は

思う。

さて、私と長女とはニュルンベルクに着いて、深い濠と城壁に囲まれた旧市街の外側に宿をとると、夕食を摂るために濠を渡り、城壁をくぐって旧市内の中心へ足を向けた。しばらく行くと、市役所の少し手前のところに小さな広場があって、「エギティエンブラッツ」と書いて標識が立っている。それを読んで私ははっとした。聞き覚えのある名だからである。右手を見ると右側の緩い昇り坂になっていて、その上の方にはやはり見覚えのある教会がある。もちろん一〇年前に来た時の記憶ではなく、一カ月ほど前にシュトゥットガルトのヘーゲル資料展示会の図版で見たとものに違いない。その教会の下手隣にセピア色の、これも見覚えのあるかなり大きな建物がある。

私は娘を促がしてその坂道を登って行った。すると案に違わずその建物の前にひとつの銅像がある。残念なことに道路工事中でこの銅像のすぐ傍まで行くことはできないが、できるだけ接近して、そそろそそあたりに漂い始めた黄昏の中で眼を凝らして台座の文字を読むと、これが期待していたとおりメランヒトンの像であった。もう間違いない。この建物こそヘーゲルが校長として勤務していたエギティウス・ギムナジウム（エギティアイムム）であり、隣の教会はエギティエ

ンキルへであった。もともこのギムナジウムは、その昔ドイツ人文主義の傑物であるメランヒトンによつて創立されたものであり、だからこそその前に彼の銅像が置かれているわけである。

バンベルクの場合と同様に、全く偶然にヘーゲルの遺跡にぶつかったことを喜んでいて、ギムナジウムの裏から教師らしい二人の女性が現われた。念のためと呼びよめて、「これはヘーゲルが校長をしていたギムナジウムですか」と尋ねると、まさしくそのとおりだという。この答えで自分の想像を完全に確認することができた私は、その足でニュルンベルク市役所の酒場へ行つて、娘とビール杯を乾した。ちなみに国際ヘーゲル協会長のバイアー教授から最近送られて来た、日本流に言えば土曜記念の著作目録に付けられた伝記によると、同教授はニュルンベルク出身で、しかもこのエギティウス・ギムナジウムに学んだことがあり、そんな因縁でヘーゲル研究者になつたということである。

イエーナ

ニュルンベルクで再びミンヘンへ帰る長女と別れた私は、一〇年前にそうしたのと同じように、鉄道でハノーファーまで行き、そこから空路でベルリンのテ

ンベルホーフ飛行場に飛び、西ベルリンで初日を過ぎた後、東ベルリンから生れて初めて東独に入った。そして東独の東端に近いドレスデンまで行つて、そこに数日間滞在し、それから西に向つて、同じザクセンのライプツィヒでさらに数日を過ぎた後、ヘーゲルの故地イエーナに向つた。

途中列車はニーチェの生れたナウムブルクを通る。きれいな小川と濃い緑の林や丘と、その向うに雄偉な教会の尖塔を眺めて、時間さえあればここで下車して一泊したいなど思っているうちに、そろそろイエーナに近づいたことを、東独のライゼビュローでもらつた地図で知つた。下車する仕度をして、列車のデツキへ行くとき、そこに乳母車を運びこんだ若いおかみさんが赤ん坊をあやしていた。やがて列車はイエーナ・ザーレという駅に着く。そこで私はそのおかみさんに「ここがイエーナのハウプトバインホー（メインステーション）ですか」と尋ねてみた。すると彼女は微笑しながら、「いいえ、この次です」と答える。それを聞いて下車しただけ私はデツキに留まつた。ところがやがて発車した列車は次の駅には停らない。（この列車は急行だった。その次の駅にも停らない。おやおやと思つているうちに、おかみさんが顔色を変えて「ごめんさい。私が間違つていま

した」と詫げる。今さら詫げてもらつても仕方がない。まよよと度胸をきめていり、おかみさんと私の対話が聞えたらしく、車内の乗客たちがあの日本人（どうして日本人だと知つたか判らない）は気の毒だと騒ぎ出した。三分ほども走つて列車がルードルシュタットという田舎駅に着く。私が下車すると、続いて降りて来た数人が私に向つて、「君はあの婦人の言うことを信用して下車する機会を失った。まことに気の毒だ」と口々に言いながら、駅長に事情を説明し、そのうえ戻りの列車の時刻まで調べてくれる。駅長も大いに同情して、「君はイエーナではどこに泊るのか」と尋ねるので、ホテルの名前を告げると、それではイエーナ・パラダイースで下車しなさいと教えてくれる。やがて来た列車に乗つて教えられたとおりイエーナ・パラダイース（天国）という駅で下りる。およそその名にふさわしくないみすばらしい駅である。駅を出ると、前の通の柵に腰を下ろしたひとりの青年が私に向つて笑いかけた。その明るく笑顔につられて、ホテルへの道を尋ねると、詳しく教えてくれたうえに、私のカバンを持っていつしよに行つてあげましょうかと言う。この日一日のうちに私は東独の民衆の暖い心に触れた気がして心からうれしかった。ホテルで旅装を解くと、遅い昼食を手

ましてすぐ市街に出る。イエーナはドレスデンやライプツィヒと違って小さな町である。ところどころに古い城壁や塔の残墟が残っている。一八世紀の前半にここは小さい町ながらもドイツ哲学の中心と称されていた。その頃のドイツの哲学者にしてイエーナの大学と何らかの關係を持たない者はほとんど無かつたし、またここはシュレーゲル兄弟らを中心とするドイツ・ローマン主義運動の牙城でもあった。ドイツで羨しく思うことのひとつは、このイエーナや前に述べたテュービンゲン、ハイデルベルクのように純粹の大都市というものがあることである。ヘーゲルに關係はないが、ゲッティンゲン、マールブルク、フライブルクなどもそうである。ただし現在のイエーナは大学のほかにツァイスの光学機器工場の本拠地としても有名である。

小さな町のことだから、地團も見ないで歩きまわっているうちに大学の前へ出てしまった。この大学は今ではフリードリヒ・シラー大学という。校舎の外側の庭にマルクスの銅像がある。マルクスはこの大学に学位論文を提出したからである。またヘーゲルとやらんでここで講師となつて以来、いわば生涯の学敵となつたフリースの銅像がある。フリースに対するヘーゲルの敵愾心がどれほど激しかつたかということは、『法の哲学』の序

文を一読すれば明らかである。大学の哲学部を訪問するのは明日のことにして、学舎にちよつと入つて見る。日本の大学ではもちろん、西ドイツの大学でもよく見かける落書きの類は全く無い。それが何を意味するかという解釈は

ひとによつて違つたろう。壁に貼られた講義時間表を見て、かねて知つてはいたがあらためて驚いたのは、講義が午前七時に始まることである。そうこうするうちに、薄暗くなつてきたので、一八〇六年一月二三日にヘーゲルが馬上豊かな

ナポレオンの英姿を目撃して、「馬に跨つた世界精神」と感激したのはどのあたりだつたやうなと想像しながら宿に帰つた。

（文学部教授
なかの・はじむ）



なんてまあ口先ばかりお上手なこと！

日中文化関係史の一面

(IX)

増田 渉

わたしの 研究ノートから

英軍の広東焼払いと カビタンの勅告

第二次アヘン戦争は、英・仏聯合軍の天津、北京攻略にまで發展し、その結果として天津条約（一八五八）・北京条約（一八六〇）を英・仏と締結し、彼等の中国植民地化政策に拍車をかける法的根拠を与えることになった。その発端となったのが、いわゆる「アロー号事件」で、一八五六年、つまり安政三年の九月に起こっている。この事件によって英軍は広東市街を焼き打ちしたのだが、これらの事件について、かなり具体的に、その経緯をわが国に伝えたものは、その翌年一月初め、長崎奉行配下の吟味役・永持享次郎と徒目附手附が、直接カビタンのドンクル・ケルネス（Donker Curtius）の談話をきき取り、それを幕府に報告した文書である。香港駐在の英

国側当局による事件の解釈を取りついでようなものであったが、当時、英本国の国会では、この強硬な仕打ちを非とするものが多く、なかでもロブデン、グラッドストーン等有力政治家が政府を痛烈に攻撃し、ついに下院を解散に追いこむという事態にまで問題は紛糾した。当時（一八五七年）マルクス（在ロンドン）もこの問題を取りあげて、英国の対中国政策を手きびしく暴露攻撃する文章を『紐約毎日論壇』（同年三月二十五日第四九七〇号、および四月一〇日第四九八四号、共に未署名）に発表している。（『馬志忠恩格斯論中国』一九五〇年、北京人民出版社）だがわれわれ日本人にとって特に注目されるのは、オランダ政府からの申付けもあつたとして、このカビタンの語った談話の後半部分で、わが幕府に重大な勅告を与えているところだ。

カビタンは今度の英国の広東焼打ちにからめて、幕府がとかく外国を見下げる自尊のふうがあり、外交文書にもそれが現えていて、相手国に不快を与えているとか、細事に拘泥して交渉を遅延させることばかりして、世界一般の外交常識から外れているとか指摘し、今度の広東事件のように、ちよつとしたことから大事が起こらぬとも限らない。お国は唐国程弱いとはいわぬが、太平が打ちついで、ヨーロッパ程軍事に馴れていないから

「この度の唐国の一件、ただ外国の事とお開捨てなく事情とくと御賢察御処置御座候様仕度き」旨を勅告しているのである。

このころ恰度、ハリスが来航していて、老中との面談、將軍への謁見、国書捧呈などを幕府に強要していたが、国論容易に決しかね、幕府はその取り扱いに困却し、ただ遷延して何とかごまかそうとするばかりであった。だから幕府はこの和蘭カビタンの勅告に相当なショックをうけ、反省するところがあつたようだ。筆頭老中で外国掛専任の堀田正睦は、「万々一、砲声一響候はば最早御取戻も難く相成候間（中略）是まで（の）御法御變革有之、其上の御取締相立候様取計（らい）方長策に可有之候間云々」という「覺」（意見）を附けて、このカビタン談話の報告書を「評定所一座、海防掛、長崎奉行、下田奉行、箱館奉行」宛に差し廻わし、「向來の御所置、罵と勅弁熱慮いたし早々取調可致申置候事」といって、この勅告に対する私の所蔵する写本では、「安政四年、己二月二十四日佐倉侯（堀田正睦は佐倉藩主）御直渡、本紙（は）評定所々相廻（し）、写（は）御目付々廻す」となっている。この文書を外交最高責任者の堀田が「直渡」したということから、事の重大性を物語っていると考へ

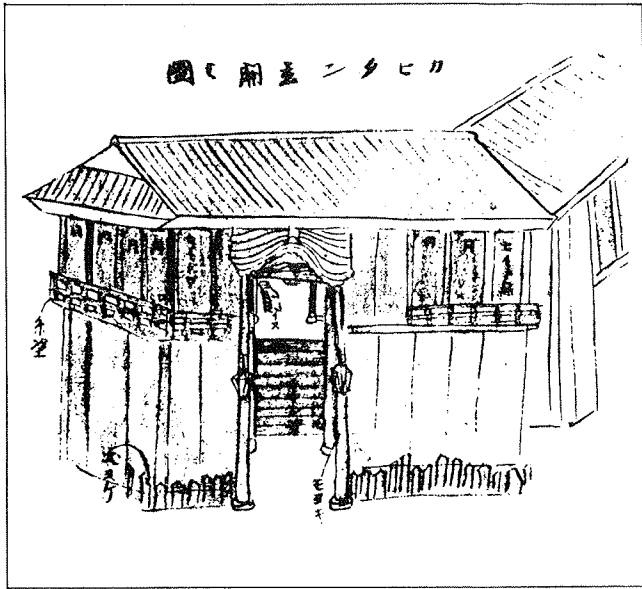
られる。

わが外交の変革

これに対して「英人広東焼佛候一条に付(き)御書取の趣(堀田の「覚」をさす)評議仕申上候書付」には、松平河内守近直、川路左衛門尉聖謨、水野筑後守忠徳等の連名で、「広東の覆轍を踏む候も、鑑計(かんけい)いから御法御変革、其上の御取締相立候方長策に可有之候」と、評議者たちも同意見を具申している。以後、「是までの御法変革」(鎮国から和親通商へ)に踏みきり、ハリスの將軍への謁見、圖書捧呈、ハリスの堀田邸での幕府首脳への演説、審書取調所(ハリスの宿舎)でのハリスと幕府要人(井上信濃守清直、巖瀬肥後守忠幾)との対話(条約文の具体的な細目についての接衝)とわが外交は急転回することになった。

なお私の所蔵にも「墨夷使節対話書」写本三冊があるが、安政四年一月六日、土岐丹波守頼貞、川路左衛門尉聖謨、鷗野民部少輔長説、井上信濃守清直、永井玄蕃頭尚志など幕府要人が、「先日(安政四年一月六日)備中守(堀田正睦)宅で申付けられ候様々の内、今一度承り度き個条も有るにつき、自分共から尋ね候様、備中守より差函を承り候間、岩委細申聞けられ候様致し度候」といって、

カピタンニテ用テ



春木南湖の「西遊日簿」より

ハリスの止宿先審書取調所へ出かけて、条約を結ぶに当たっての、海外諸国の事情などを質しながら、こまごましたことを詳しく聞いている。

その後、同年二月二日に始まり翌年一月二日まで、前後二三回にわたり、わが方の責任者、井上信濃守と岩瀬肥後

守とが審書取調所で、ハリスの提出した条約草案について、一々こまかく質疑応答を繰り返して、検討した。これを詳細に記録したものが、いわゆる「対話書」で、井上信濃守、岩瀬肥後守二人の連名で報告文書になっている。

さて右のカピタン(キュルシユス)談話の報告、およびその前後の公文書状などは私の所蔵する「外夷珍説雜記」と題する「幕末外国関係史料彙編」とでもいうべき筆写本(美濃版二冊、明治初期の編者岩瀬か)のなかに収録されているが、とくにこのカピタン談話は「大日本古文書」の中の「幕末外国関係文書」の一五(大正二年、「東京大学史料編纂所」)や「幕末維新外交史料集成」(昭和十七年、「維新史学会」)をはじめ諸書に引用されるところだ。「維新史料綱要」巻(昭和二年「維新史料編纂事務局」)にも、安政四年二月(四日)の条に「幕府広東館に於ケル清・英兩國紛議ニ鑑ミ、外交措置に安革ノ要アリト為シ、評議所一座、海防掛及下田・長崎・箱館各奉行ニ命ジテ、之ヲ審議セシム」といって、これに関する多くの引用史料(筆写類)をあげている。当時この衝撃的なカピタン談話はかなり流伝されたものようだ。カピタン談話とともに堀田正睦の「覚」も併せて載せたもので、私の目にもふれたものに内藤趾斐の「安政記事」(前出)と木村芥舟の「三十年史」(前出)がある。とくに「安政記事」には、カピタン談話と堀田の「覚」をあげた後に、「是ニ於テ貿易和親ノ議、正ニ決シテ幕中議論(定)といっている。幕中の議論は一定したとしても、民間有志者の国論は一定したわけではなく、紛擾はつづくのだが、

しかしともかく幕府は外交の変革に踏み
きつたのだ。このようにして第二次ア
ヘン戦争の発端となったアロー号事件によ
る英軍の「広東佛佛い」は、わが国の歴
史を新しい段階に追いあげることになっ
たのである。

『夷匪犯境録』

アヘン戦争（第一次）については、被害
国側としての中国への立場から書かれた
もので、わが国に伝えられ、広く写本で
読まれたものに「夷匪犯境録」（不分巻）
がある。誰の手で書かれたものか、また
どういう経路でそれがわが国に伝えられ
たのかは、いまま知られていない。この
書はアヘン戦争のことを書いたものとし
てわが国に広く知られながら、中国には
伝えられていない。「中国近代史資料叢
刊」のなかの「鴉片戦争」資料第六冊に
収める「鴉片戦争書目解題」（一九五四
年、上海「神州国光社」）は、中国に現
存するアヘン戦争関係史料を広くあつめ
て解題しているが「夷匪犯境録」は書名
をあげただけで、「待訪書籍」つまり目
下探求中の書籍としている。日本に伝え
られたこの書籍名だけは知っていても、
現物は中国では見当たらないからである。
あるいは初めから中国でも刊行されず、
写本のまま日本に渡来したのかと思わ

れる。日本でも初めは写本で伝写された
が、桂湖村の「漢籍解題」（明治三十八
年「明治書院」）には、「夷匪犯境聞見録」
六巻をあげて、

「此書は清の道光中に英吉利が清の南
境を犯したる顛末を記録したるものな
れば、かく命題したり。何人の編集せ
るやを詳にせず」
といひ、そして最後に「我國安政四年、
明倫堂藏梓本あり」と和刻本のあること
を附記している。ところが一方、笠井助
治「近世藩校に於ける出版書の研究」（
昭和三十七年「吉川弘文館」）では、九州
高鍋藩、明倫堂の出版として「夷匪犯境
見聞録」六巻をあげ、「藩主秋月種殷撰
安政四年刊」といひ、そしてその内容に
ついて、

「明治維新前の嘉永・安政年間に於け
る諸外国との外交に関することを記し、
またその外交書類を輯録したもので、
諸生に海外諸国の知識と時局を認識さ
せるための著述である」
と説明されている。同じく六巻本で、安
政四年明倫堂刊でありながら、「たゞ標
題が前者は「聞見録」、後者は「見聞録」
とちがうだけ」その解題するところは全
然内容がちがうのである。また「漢籍解
題」では「何人の編集せるやを詳にせず」
とあるのに、「近世藩校に於ける出版書
の研究」では「藩主秋月種殷撰」である。

全く別種のものようだ。

昔の中国の書籍で、いまは中国には逸
して日本に残存しているものの目録に、
多少の解説を加へた「佚存書目」（昭和
八年、「文求堂・松雲堂」、服部宇之吉
編纂、序によると神田喜一郎・長沢規矩
也執筆）を見ると、「夷匪犯境録」三巻、
夷匪犯境見聞録三巻」を標記して、「不
著撰人名氏」とし、「安政中木活字印本」
「江戸時代鈔本（不分巻）」と刊本、写
本の両方をあげている。そして「鴉片戦
役の起りしことを叙ぶ。本邦には写本往
々伝わり、本活字印本は近來流伝少し」
という説明が加えられているが、「起り
しことを叙ぶ」というのは間違いで、「起
りしこと」は欠けていて、イキナリ定海
県主への英軍の降伏勅告文にはじまって
おり、最後は講和条約文まで叙べられて
いる。内容をよく読まないで解説したも
のようだ。

「内閣文庫図書第二部漢書目録」（大
正三年）の「雑史」に「夷匪犯境録」安政四年
刊六冊」と記載されているが、「節嘉堂
文庫漢籍分類目録」（昭和五年）「節嘉堂
文庫」、右代表者語橋敬次）の「雑史類」
には「夷匪犯境録」と標記して、その下
に細字で「三巻、附「夷匪犯境見聞録」
三巻」と入れ、撰人歟（寫（本））とあ
り、冊数は六冊になっている（因みにこ
れは中村数字の旧蔵書とあり）。これは

写本であるか、もしこれが木活字本に拠
つたものとするれば、中国から伝えられた
アヘン戦争記録「犯境録」三巻と、それ
に「附」した秋月種殷撰の「わが嘉永・
安政年間の諸外国との外交及び外交関係
書類を輯録した」という「犯境見聞録」三
巻を、（それぞれ別の一種を）二まとめに
して併刊（六冊）したものである。そう
解釈すると、「漢籍解題」の説明と「近
世藩校に於ける出版書の研究」の説明と
の食い違いについても理解されるわけ
だ。ただし「夷匪犯境聞見録」と標記し
た「漢籍解題」の解説は、実は「犯境録」
だけの解説であることになる。「佚存書
目」が「犯境録」と「犯境見聞録」とを
連記して、「鴉片戦争の起りしことを叙
ぶ」と説明したのは、前者だけについて
いっているのだ、後者については何もふ
れるところのないものだ。ただし私はこ
の「流伝の少い」木活字印本を見ていな
いので、断言をはばかるが、自分なりに
このように解釈すると辻褄があらう。

「夷匪犯境録」（不分巻）の写本は、
私は一種所蔵するが、この書の性質内容
については次にべる。

文学部教授
ますだ・わたる

空間構造Ⅲ 差別の

三栄吉末

「沖縄における住宅難の構造」

その2

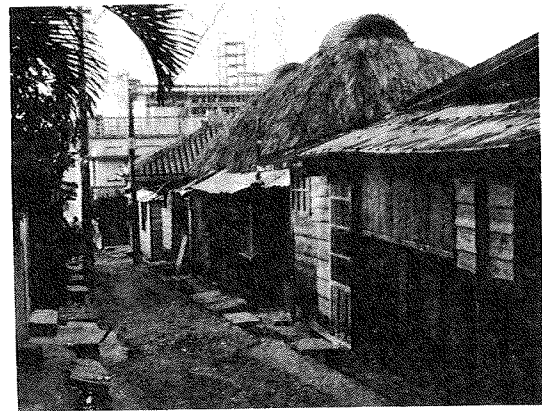
1° 一九七〇年の国際調査によれば、沖縄の住宅難率は、一二・二%（普通世帯二万四八〇〇）に対して住宅難世帯四万七五〇〇）となっている。那覇市においてはさらに高く、二九・四%（一九六九年二月現在、つまり、三世帯につき一世帯は住宅難世帯という事になる。これは大阪市のパーセンテージとほぼ同一である。大阪市一九・五%、一九六八年一〇月。ちなみに東京都の住宅難率は六%、大阪府のそれは二〇・五%である（ともに一九六八年一〇月）。さらに人口規模等で沖縄に近い佐賀県、鹿児島県では市部に限ってさえ、それぞれ一〇・五%、一六・二%にすぎない。

2° 沖縄の住宅難の構造をもう少し詳しくわきまてみよう。注出に述べたように住宅難世帯は大きく①非住宅居住の同居②老朽住宅居住③狭小過密住居の世帯と四つに分けられるが、沖縄の場合①はほとんどなし（二〇〇〇戸）、②③④がそのすべてである。話をわかり易くするために、②③④それぞれについて大阪府、大阪市の場合と比較してみよう。まず②同居世帯数は沖縄一万二四〇〇戸（普通世帯総数の五・八%）に対して大阪府一万二二〇戸（同じく一・二%）、大阪市一万四七五〇戸（一・八%）。③老朽住宅居住世帯数は沖縄

九二〇〇戸（四・三%）、大阪府二〇〇戸（〇・二%）、大阪市一〇二〇戸（〇・二%）。④の狭小過密居住世帯で沖縄一万五七〇〇戸（二・二%）、大阪府二万四九六〇戸（二・八五%）、大阪市一九万二四六〇戸（四・一%）となる。つまり沖縄の住宅難は同居と老朽住宅への集中度が異常なほど高いという事である。

もちろん狭小過密居住の問題が、大阪府、大阪市にくらべて沖縄においては小さいというのでは決してない。ちなみに一人当りの居住畳数をとってみても大阪府が四・二畳/人に対して那覇市のそれは三・五六畳/人にすぎない。つまり話はこうである。大阪府（そして他の日本本土の大都市）においては、同居や老朽住宅の問題はかなり減少してきており——もちろん問題が無くなったわけではない。自分の足で歩けば誰にでもすぐ気づくように、まだまだ大阪市内においても老朽住宅は多い。私は先にあげた調査統計調査の数字は実感より大分小さいという気がする。——問題は次の段階、つまりひとつの世帯が一個の住戸に入居し（二戸建という意味ではない）、最低限の世帯の独立は確保したものの、今だに狭小過密居住を強いられているという現状に矛盾が集中していると考えてよい。ところが沖縄の場合は、まだ問題はそれ

わたしの
研究ノートから



上 那覇市の米軍住宅地。ヘクタール当り24人。
下 都心部の老朽住宅群。ヘクタール当り500人。

以前の段階にある。多くの人々は生活の最低限の要求である独立した住戸に入居する事さえできず、老朽した住宅の一部を間借りして世帯の生活を営まざるを得ない状況におかれている。住調で「同居世帯」と分類されるうちの多くの部分はこの「間借り世帯」である。玄関などは無く、伝統的な民家の如く縁側から直接中に入る。四・五帖〜六帖の室に三帖ほどの板の間(炊事場)のついたタイプと、全

くの一室に〇・五帖ほどの炊事用の板の間のついたタイプが半々ほどである。このような同居世帯の一人当り畳数は、さらに下って二・四一畳/人(那覇市、一九六九年)となる。

3。では、どうして沖縄の住宅難況にあるのだろうか。第一には、前回で述べたように沖縄が戦場にされた事でほとんどすべての住宅が破壊しつくされた

事による。その数約一〇万戸という。一九六九年時点における那覇市の住宅総数六万〇三〇〇戸のうち戦前(一九四五年以前)に建てられたものは三〇〇戸しかない。このような場所は日本のどこにもないはずだ。そのような中から、戦後沖縄人がどのようにして自分たちの住む場所を築いていったかは前回に簡単にふれておいたので、繰り返さないが、戦後すぐに建てられた住宅の多くがその後簡

単な修理や建て増し以外には、大きく手を加えられたり、建て替えられたりもせず、那覇市をはじめ沖縄の人口の六と七割が集中している沖縄中部の各都市の都心部を形成している。九二〇〇戸と国勢調査に出てきた老朽住宅の多くのものはこれである。何故建て替えられないかといえば、早い話、金がないのだし、それに加えて現在では都心部になってしまっている地主が居住者に建て替えを許さないのだから。つまり住めなくなったら、壊して出ていってくれと云っているのだ。このような住宅の多くは、間借り人(世帯)を置いている。それは借屋経営といえるようなものでももちろんなく、家計のタシほどのものであるが、その「間借り人(世帯)」の多くは、沖縄のさらに南の島々、宮古や八重山から来た人たちである。この宮古、八重山をはじめとした多くの島々から那覇市とその周辺地区への人々の大質量流入——これが沖縄の住宅難を深刻なものにしている。一番目の理由である。琉球王朝の昔から現在に至るまで、沖縄本島にある政治権力(とその人々の宮古、八重山差別)と収奪は一貫して続いている。よく知られているように、明治三六年まで続いた人头税の歴史は、宮古、八重山に集中されたし、戦後においても、そして文字通りペテン

師的「革新の厚良が「知事」になつてもその差別と収奪の政策は何一つ変つていない。島々から学校をうばい（教員はあまりすぎで困つてゐるのだ）、医者をうばい、そしてその島々の主産業である農業や漁業に対して何らの積極的施策も行なつてこなかった。当然直るべき病気やけがでさえ、一人の医かいは（保健婦）さえいないために死んでいった人もいるし、子供を学校のある比較的大きな島（宮古島、石垣島、沖繩島など）に下宿させて通学させるには金がかかりすぎ、結局子供を学校にやるために一家があげて自分の島を出ていく例は日常事だ。そのような状態をなくす的に進行させたのが一九七一年夏の早魃とその秋の台風災害である。宮古、八重山の島々のサトウキビは全滅し、牧草も枯れたために家畜も死に、あるいはやせおとろえた。やせた牛はタダ同然のネタンで沖繩島をはじめとした業者に買いたたかれていった。宮古島のある町長さんは、私たちにはつきりと「これは厚良琉球政府の差別政策によるものだ」と豊つた。宮古島にも石垣島にも地下水は豊富にあるのだ。ただ灌溉施設が全くないのである。キビは枯れ牛は死んだ。そしてその秋には台風で多くの作物と家屋がやられた。人々は二重にも三重にもたたきめされた。そこへ入りこんで来たのが日本人土地ブローカ

ーである。もちろん沖繩人ブローカーも入りこんだ。しかしその札束の数において日本人のそれの比ではない。とにかく奴等は借金をかかえて気が失つてしまつた島の人々の弱みに徹底的につけこみ坪一〇〇円一〇〇〇円というタダ同然の価格で人々の土地を取りあげていった。しかも、一〇〇万坪単位という広大さである。東惠・伊藤忠・三井・三菱・住友・日商岩井等々をはじめとして無数のブローカーが暗躍した。かくて沖繩の土地はこの日本人どもに喰いちぎられ虫喰いだらけの木の葉の如き惨状を呈している。去年暮れの沖繩タイムスによると①「復帰前一年から一年半の間に売買面積一〇〇〇平方メートル以上のもので②調査地域は沖繩本島周辺離島、コザ、読谷、嘉手納、北谷、那覇、与那国島を除く全沖繩で③一週間の調査期間により明らかになつたもので、売られた土地は六〇〇〇ヘクタール、これに「ウワサ」のあるものを加えると七〇〇〇ヘクタール、さらに賃貸借地を含めると約八〇〇〇ヘクタールとなつてゐる。

4。話が長くなつたが、このようなかたちで人々は先祖代々の土地を手をばし、那覇へと集中して行く。最近では那覇を飛びこえて日本本土へのお稼ぎの比重がしだいに増えている。日本本土へ出た人たちの話は今は置くとし

て、那覇とその周辺に流入して来た人々を知人へ頼むのか。先にやつて来た親戚でもらうか（これは、先住者自身が狭小過密な間借り暮らしが大部分なので、いずれにしても長くは住めない）、その近くに間借りするのがまず普通のかたちである。そしてその間借りさせてもらう家が先述した都心部の老朽木造住宅地区のひとつである。世帯を支えていく人の仕事は保証人などの差別が少なく、あまり経験を必要としないものに限られてくる。例えば最近の土産チームのために需要の多い木工、手依い、はつり工などである。家賃も決して安くなく、しかも狭小過密居住の状態を強いられるこのような地区にももちろん無数のトリ、エがあるからこそ、人々はそこに住むのである。例えば仕事場に近い事、買物などの日常生活の便のよき事、子供も学校に近い事などである。比較的家賃も安く設備もよい公営住宅に当然多くの魅力を感じ、現にそれに入居していく、しかしその公営住宅事は確かであるが、かたしちの公営住宅も多くの利点にもかかわらず、現実には現住地を先述した諸々の事情で動かない人々も多い。郊外の公営住宅に入居すれば同時に仕事や買物を日当生活において多くのものを失う事になる場合が多いのである。それ故本来、低額所得者のために作られるべきはずの公営住宅に、現実には多くの人々は入居できないのである。次回はこの公営住宅の問題を中心として住宅の沖繩における現状と問題点をのべる事にしたい。

(追記)——書誌誌、第二号の拙文・ゴッドファーザーの書評において、フランク・ファンを「アルジェリア人と書きましたが、これは私のハヤトチリで、実は西インド諸島フランス領マルチニク島の出身でした。おわびして訂正いたします。なおこの島における植民地解放闘争のインタヴュー報告が「序章第一」号のついでにあります。

注一 住居標準——現在、日本においては非住宅居住・同居・若狭住宅居住・狭小過密居住の世帯・住宅標準世帯と規定しており、普通標準数に対するその割合を住宅標準としている。この判定方法はそれ以外の規模のとり方がかなりアイマイなところ、例えば家や自衛隊寮など、諸々の住居をおびなかにしている条件をきつたものであり、特に目的な居住水準を判定方法としては多くの欠点を持つものであるが、現在のところ全国的な調査はこの方法を使っており、各都市の比較などにおいて便利なので一応この標準をあげた。

注二 琉球政府・建設費 一九七〇年 工学部助手 すえよし・えいぞう



読者の声

『書評編集者への提言』

経済学部三回生

川上 敏男

「書評」を一瞥して「すこしおもしろそうではないか!」と自問自答した程、僕にとって一つの光のように感じたのです。もし今の大学生活に不満を感じ、空虚さを喚んでいる人がいたら、この「書評」がその人に小さいかもしれないが、何らかの力となるのではないかと期待するのです。

ここで僕は自己内部における書評の多少意義を確認しつつ、「書評とは何か」「書評がどんな意味を持つか」等について述べてみたいと思います。大学という一般には他の力(政治権力・資本主義企業・その他)から干渉されない、学問をしようとする者のコミニティーにおい

て、学生にとって学問とはいいたい何なのか?! 勉強するということはどういうことなのか。企業に入って有能に働ける人間になることが大学で身につけるべき唯一の学問なのだろうか? ここに至って学問の危機を感じ「学問とは何か」という命題が再提起されました。今日

どのようにして学問へアプローチすべきか、学問を個人内でどのように還元するか、その命題の解題、あるいはその考察への足がかりとしての「書評」への希望を列記してみました。(たぶんユーロピア的発想があります)

- ① 大学における学問の一つの原点をなすこと(学生の中から起ったこと)。
 - ② 大学を学問的有機体となすこと。
 - ③ カリキュラム改定等という施策に対する学生の思考の起因基盤となること。
- しかし、「書評」の読後「だいたい程度が高いなあ」と感じたのが正直なところ

です。書評の大衆化を旨指されるのなら、このままの状態(自分の関連のある講義に関する論文が掲載されている場合を除いて)では読者が減少するのではないのでしょうか。教授の研究ノートを読んで一般学生が理解するのに相応な知識が必要だというのが読者の総意だと思います。要するにもっと大衆化しようとするなら、読者の著者や作品へのアプローチを促すようなものが、適当な長さで、もっと簡単な内容で掲載されれば、読者も平易に読めるのではないのでしょうか。

『ニッポン釜ヶ崎』(二五号)に思う

大学院生

房 伸吉

当協氏の評は、私自身が「そこ」から余り遠くない所の住人である関係上、確かめながら眺めさせてもらった。著者と評者と私にはやはり懸隔があるのは致仕方がないとしても、その街の描写が、平板である。その街を総称して論じる為には、表向きの「街の素描」では不適である。スラムに住む、人の生活様式を描いても何にもならない。その街の地理的範囲とその街に連なる町の背景について何ら論及がなされていないのは止むを得ないとして、「迷路のような露地裏の住民

は、己れの今日の保持だけで精一杯である」街に、なぜあのような高層ホテルが建つのか、なぜ暴力団が巣くうのか、警察をも含めて行政の力が及ばないのか、その街を 恥部 を解消し得ないのか、ということ論じないのは片手落である。生活の悲惨や精神の悲惨は、世界中の様々な場所で形を変えて存在する。個別的にささる見るならば、評中に例とされている程度の生活様式は、どこにでもみられるのである。それでは日本にそこだけしかない「カマガサキ」を見たことにはならないのである。「カマガサキ」は流動的な「カレラ」だけで構成されているのではない。流れて、また流れて行く者、定着する者、そして地下の者、そしてまたその街を利用する者によって構成される。「カマガサキ」という実体は何であるのか、街であるのか、機能はあるのか、人の心理なのか、そういっただ人の魂であるのか、それとも本来彼等の居るべく用意された島であるのか。彼等をそこに無理矢理押し込める、ダイナミックスを出し得ない限り、思い出したくない、捨てたい「故郷」というものを評者に理解してもらって期待は満たされ得ないのかもしれない。所詮、思考という遊戯に自樂する傍観者の域から、われわれは容易には脱け出し得ないであろうか。

『書評』とは

社会学部三回生
新井章生

「書評」誌の割付を考えると、表紙に目次と左上に写真を配置してあり、次号予定なるものが中に埋れてしまっており、毎回場所が変わっている。もちろんスペースの面で無理もないと思うが、それなら、いっそのこと表紙全面に写真(イラスト等)を配置してはどうだろうか。この時の題材は、従来のように「書評」誌に登場する作品の内容からとった写真、版画、イラストを調べたいと思う。そして、目次と次号予定をいっしょにして最後の頁にもつけてはどうだろうか。また「書評」とは、辞書には「書物(特に新刊書)の内容などを紹介しながら批判した文章」とある。しかし、末吉氏の「ゴッドファーザー」のように編集者の作成意図がはつきりしすぎて、あらか

じめ結論が想定されていたような書き走りには少々興味を欠いた感がなきにしもあらずである。書物を媒介とする書評では、評者自身が意図する所を述べるのであり、またその際の彼自身の消化の程が「書評」誌全体については、もう少し時事的な話題を多くとり入れた方が、一般読者にはとりつき易いと思われるがどうだろうか。「日中友好」「恍惚の人」などのように非常にタイムリーといったもの

もあつたが、やはり色褪せて見えるといったものも多かったように思われる。一般読者の日常的にかかわりのある本からもっと積極的に書評してもらい、またそのスペースを設けた方がよいのではないか。そういう比較的一般向けの話題の中から、この「書評」誌と読者との結びつきが生まれてくると思う。そうすれば定期的すなわち恒常的な「書評」誌の展開ができ、新しい活路が見い出せると思

う。

(読者の声・イラスト)募集

「書評」誌の内容を豊富にし、かつ読者と一体となる場をもち、読者からの縦横無尽な批判を受けつけ、また書評が一つの発表の場となるように「読者の声」への意見と「イラスト」を募集します。

1) 読者の声

- ◆ 原稿は400字詰原稿用紙の下二段を使用しない(1行が18字になる)で、1枚360字詰にして3枚以内(1000字程度)にまとめて下さい。
- ◆ 原稿は短かくすることがあり、一切返却しません。

2) イラスト

- ◆ 横(4cm)×縦(8cm)。
- ◆ 1色(ペン書き)で独創的なものを。
- ◆ 作品は原則として返却しません。

いずれも、採否に対する問合せには応じません。住所・氏名・所属・学籍番号・電話(匿名希望はその旨を)明記して下さい。

「書評」の発展のため、どしどし参加して下さい。

次号予定(28号—6月発行)

■ 書評

- ◇ 望郷と海
- ◇ 野火
- ◇ ロシア革命
- ◇ ソルジェニーツィン(上)

■ 私の研究ノートから

- ◇ ヘーゲル語で(Ⅶ)
- ◇ 差別の空間構造(Ⅳ)
- ◇ 日中文化関係史の一面(X)

日本の青春、が残した情熱と彷徨、
青春の記録 金八巻

人間の直面する種々の問題をもつとも集中的に情熱的に、一身に背負うのが青春だとすれば、青春の充実を模索した先輩たちの日記・手紙・記録のなかにこそ、今日の青春、の意味をたずねることができるにちがいない。

あしたの墓碑銘

安田 武／編・解説

死んだものが還ってこない以上——現代の青春が死者にこたえる道は何か？ 震ながるる果てに、地のさざめごと／わがいのち月明に燃ゆ／くちなしの花 他

孤独なる渴望

福田善之／編・解説

恋と革命と詩に青春のすべてをたくし、炎のように生きえた青春群像の記録／三日幻境／二十歳のエチュード／一七歳の鎮魂曲／詩と反逆と死 他

- 3 自由の狩人たち／秋山 清編
 - 4 明日への絶唱、／むのたけし編
 - 5 未知への飛翔、／小田 実編
 - 6 生きてある証、／尾崎秀樹編
 - 7 愛あるところ、／多田道太郎編
 - 8 わが青春のとき／谷川健一編
- (三二書房 各六八〇円)

ぼくは死にたくなかった

大原健士郎著

ある日突然子どもが自殺する。肉親や教師は、その原因がわからないという場合が多い。小・中・高校生の四〇の実例を取り上げ、自殺に焦点をあてながら、怠学・非行・家出などの問題行動を取り上げているが、子どもを自殺から防ぐ親の姿勢」についての記述は具体的に、親や教師に反省の手がかりを与える。

(日新報道 六〇〇円)

しいのみの子供たち

黒地三郎著

一七年前、ノンフィクション映画「しいのみ学園」が、全国的な感動を呼んだことがある。学園は現在も、立派な実績をあげているが、本書は、一七年前のあの子たちが、その後どのように卒業し、社会人になっていったかのありのままな記録である。必死に育っていく子供たちの姿と、先生と子供たちとの愛情が感動的であり、福祉や教育のあり方について多くのことを考えさせる。

(徳間書店 六三〇円)

書物の案内

(徳間書店 六三〇円)

死について

アールルト・トインビー著

橋口 総 他訳

トインビーほか、心理学・人類学・哲学等、現代イギリスを代表する識者により、死の隠蔽への抗議とともに、死を多面的に考察した名著。

(筑摩書房 一五〇〇円)

一五才の遺書

アリス・D著

平井イサク訳

清纯で多感な一五歳の少女が、なぜ初恋にやぶれ、麻薬のとりことなり、そして、新しい愛を得たのもつかの間、一七歳の誕生日、突然のなぞの死。

(講談社 四八〇円)

望郷と海

石原吉郎著

シベリアの強制収容所で、飢えと重労働で、死に瀕した日本人の人間分析である。満ち足りた現在の人には、飢えと酷寒下のつらさを、文字だけで追体験することはできない。

生が死かの瀬戸際をたつて同胞相食む陰鬱なかつころの繰り返されるなかで、あらわにされる人間の生き方、あるいは死にさまが、強く人の心をゆさぶる。

(筑摩書房 九〇〇円)

自由への挑戦

B・F・スキナー著

波多野 進 加藤 秀俊 訳

これは危険思想なのか？ それとも救世の哲学なのか？

人類が、「自由」を絶対価値として信奉している限り、戦争・人口過剰・環境汚染などの危機から、逃れることはできない。では、「自由」にかわる新しい価値とは？

現代の道徳観・価値観を、根底から覆して、発死と同時に全米ベストセラーの上位にランクされた衝撃の本！

(蕃町書房 七〇〇円)



これもまたなぜかわからない

編集後記

モチーフ「若者の自殺」に則って依頼した四つの書評は、それぞれ編集部で意図した「生の追求」にある程度アプローチできたものと思います。執筆者の方々には、これで終るのではなく、これから更に「自殺」と「生」への考察を深めていただいて、また投稿されることを期待します。また読者の方も「死に急ぐ若者たち」「二十歳の原点」等を自分自身で消化し、「書評」に投稿されることを歓迎します。

大阪工業大学「書評編集委員会」との合同編集をはじめ二回目の発行なのに、工大からの作品を掲載できなかったのが残念です。来月号(二八号)には必ず載せることはできます。

また、今回から「読者の声」「書物の案内」欄を設置して、読者の意見、批判を発表し、それを編集に反映させてゆき、新刊書や現代の我々に密着したところの書物を紹介していきます。そしてこの新しい分野の活用によって、書評活動が豊富に、また広範な論争の場となるようにと考えております。

二八号はモチーフを「生と死の瀬戸際に立たされた極限状況での人間の可能性とその生存意欲の追求」として、「望郷と海」「野火」を各方面から書評してもらい「人間性の追求」にアプローチする予定です。

増田渉・松枝茂夫・竹内好 編集翻訳

●新書判・布装函入・平均二七〇頁 定価各三八〇円

魯迅選集 全十三巻

●内容見本進呈

魯迅歿して三十有余年、その間、日本も中国も著しい変貌をとげたが、魯迅の真価はいよいよその輝きをまわしてきている。魯迅は新中国の精神的支柱であるばかりではない。日本の読者にとつても、時代と文学との相関の中で、常に力と勇気を与えてくれる得がたい教育者である。小社は魯迅歿後二十年、中国解放後七年にあたる一九五六年、魯迅研究の權威たる三先生の編集、翻訳によつて、この著作集をはじめて発刊し、更に六四年、増補改訂の上再刊したが、今回更に強い要望にこたへ、ここに三たび刊行することになった。



《本選集の特色》▼魯迅の全作品と重要な評論のほか、日記、書簡等の注目すべきものを収め、大全集ともいふべき内容である。▼魯迅研究に多年心血を注がれた三權威者がその構成と訳文とに完璧を期し、各冊に適切な解説を付した。▼中国で刊行された新全集に基づいて補注を加え、また新発見の書簡を加えてある。

セット・セール

*全13巻セット/四、九四〇円
*各巻分売もいたします。

●全十三巻の構成

- 第一巻 呐喊・野草
- 第二巻 彷徨・朝花夕拾
- 第三巻 故事新編・两地書第一集
- 第四巻 两地書第二集・第三集
- 第五巻 墳
- 第六巻 热风・華蓋集・華蓋集続編
- 第七巻 華蓋集続編・而已集
- 第八巻 三閑集・二心集
- 第九巻 南腔北調集・偽自由書
- 第十巻 准風月談・花边文学
- 第十一巻 且介亭雜文・且介亭雜文二集
- 第十二巻 且介亭雜文末編・集外集・他
- 第十三巻 日記・書簡・年譜

岩波書店

東京千代田一ツ橋/振替東京26240

